

日本廻道中膝栗毛

54  
88

091826-000-1

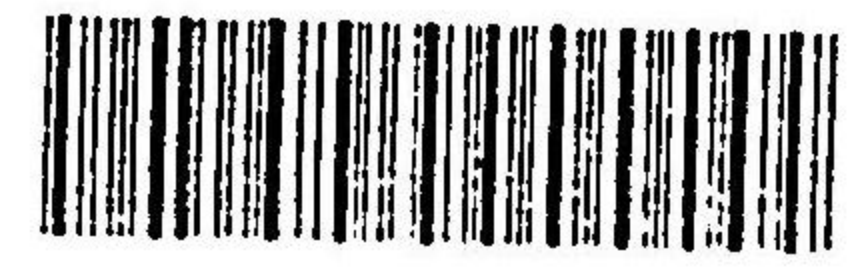
特12-248

日本廻道中膝栗毛

皜溪仙史 / 著

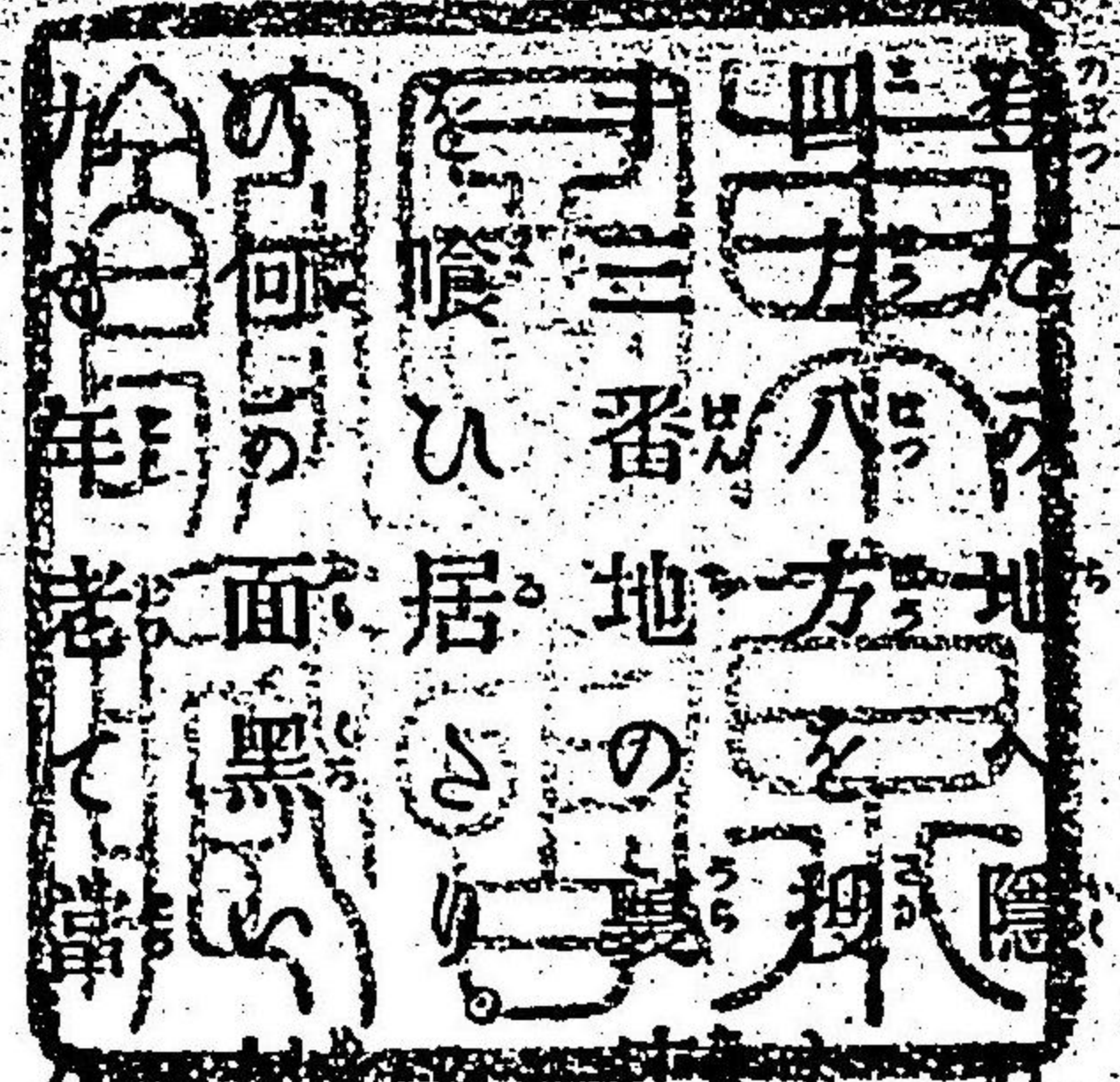
M24

DBO-0343





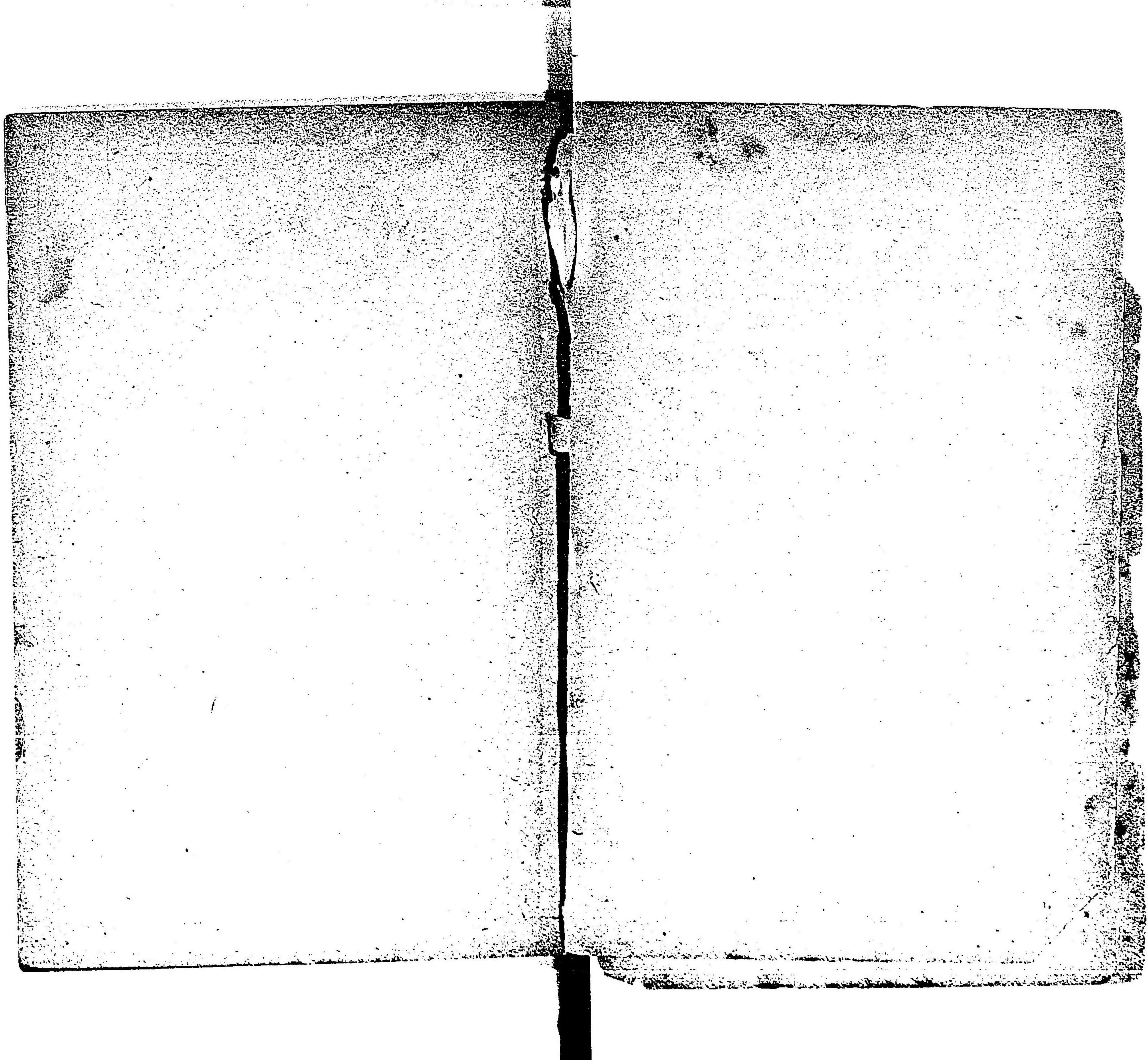
自序  
滑稽の元祖洒落の間屋十返舎一丸の七代物  
た儘踪跡が解らん隣りの後家と逃のせぬ天へ



四三番地の裏店に彌治郎兵衛の居候と化て曳割飯  
喰ひ居ると  
の何の面黒い妙案の咄を繰り親玉を訪  
何の面黒い妙案の咄を繰り親玉を訪  
百五十二歳甚た不沙汰をしと故  
様子の解らんが海外貿易も開けとを無面白  
からふ。即席の思ひ附たが舶來の赤髯彌治の











像肖チアタル



像肖クツイガウキ

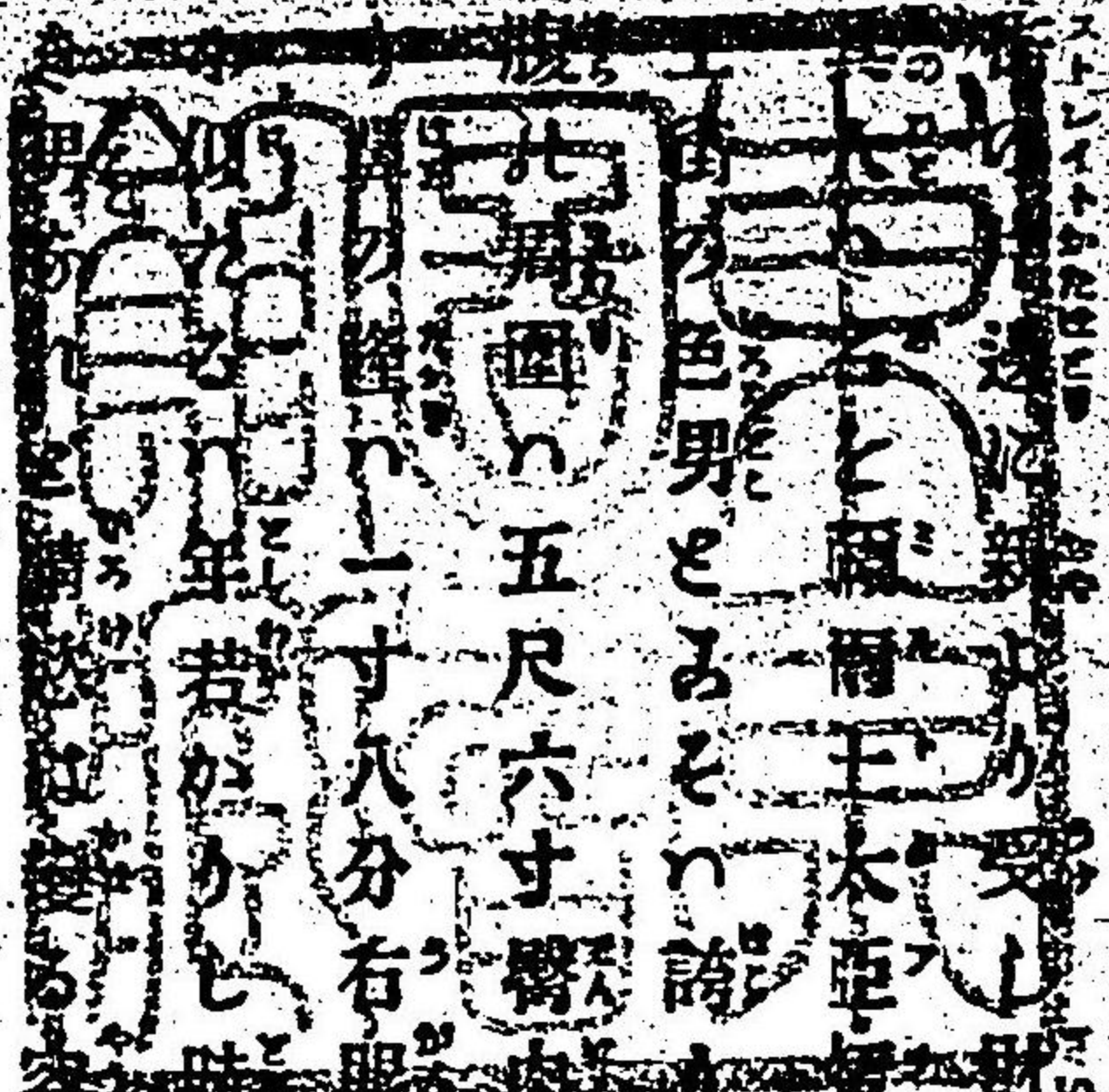


當る一相違ふい遣附て見ろと問屋のら卸された。  
直様筆を揮て書き終り元祖一九の校正を頼うと  
をると相憎冥士の大洪水で腕車も電信も不通と  
成た。書肆の一儲けと急ぎ原稿を印刷ふ附したり  
編者の是ふ於て眞一困つと。讀者品物の劣きを見  
出さぞ問屋の一九へ懸合給へ慥かに冥士で達者  
て御坐る

明治二十一年十二月 幡溪仙史誌

第一章

幡溪仙史戯著



（慶應の）濱坂も盛とぞ稱る豊葦原を海路遙よ西の極英利西國の倫敦府王  
工由の男とるその詩けける其の容体を茲に記せば身の長漸く三尺二寸  
腹は圓の五尺六寸臀肉高く凸出し両脚膝の邊まで屈曲し頰高く青筋の  
眼の寸八分右眼飛び出て蝦此眼の男髪たり左眼の凹みて螺の穴  
年若かりし時密賣淫を買い報どの滴る眼よて知れたり斯る醜  
彌爾士太亞智其友人あて常と睦とける其人の名を喜織伊久と呼び久きく  
淋疾を患て床あぬりしが漸く全快し徐々に歩みて彌爾士太亞智を音訪ひ



戸を叩けば彌爾士太亞智の涎々あがら眼を摩擦り戸を開く機會も石段より轉げ落ち彌痛い！疼い！痛いを破れた喜是の困た誰の來てくれ！何處の破れた彌馬鹿め己比家も誰が居るものか早く醫者を聘て來い喜疼い！己の歩けぬ淋疾の痲痺まで陰囊が引釣りて行けぬ！一体何處の破れた彌斯處だ斯處だ喜股の其や困た彌痛い疼い！斯處だ陰囊だ喜疼い痛い己と同様だ困たも痛い痛い！隣のお婆が飛で來て彌何う志あそつた困たもんだ疼い痛いで物分らぬい何處の痛い何陰囊が打處み程がある何れ醫者を聘て來ようと思出し弓も腰を擦りあがら息急き醫者を聘來り彌此人外でムいませ醫此處での治療が仕憎いの彌私に擔て與へ参りませよう彌浮雲ぞ氣を附い浮雲ぞ老姫の喜娥伊久を擔て與へ行き寝蓋も臥し又も彌爾士太亞智を擔て石段を登る時急も腰が疼く成り兩人共轉げ落ち彌痛い！疼い！頭腦の裂そうた彌困たもんだ彌痛い！疼い！齒の三枚欠ました血が流れませ彌私に醫者でムらぬ醫者へ行て診て察らぬ

あさいと云つゝ自ら肩を貸ひ奥の一室へ入あける後お婆の齒をまじ流るゝ涙を拭あがら彌是非及ばぬ！痛い！一時も早く醫者此許へと欠し齒を持ち出て行く彌漸々是で治療が終りました疼痛はありませぬ彌有難ふ喜有難ふ彌喜少しも疼痛の御坐いませぬ然て藥價其外御療治代の何程差上て宜うムませう彌大概爾君方のお胸お有ませう彌お前も治療を受たぬら半額出せ喜出さぬと言んぬ今持合の無い彌お醫者様へ此者の唯今持合の有ませぬ私だけの分御受取下さいませし何も是より困り升醫其の成ませぬ斷然承知出來ませぬ彌然様から御受取下さい兩人分を醫駭いた是の少さい御一人前五拾弗づゝ御拂を願ふ彌仕方のさい盜賊も取れたと思て彌何ぶと拙者を指して盜賊といは是の聞捨に成ませぬ名譽を害されし上の法廷の裁決を仰ぎ五千弗此要償を申受ん彌爾士太亞智の青く成り又赤く成り手を拱きて心配し彌何志たら宜志あらう喜何も仕方のあい面の強情ら志い彌亦も嘲弄あさる此の彌喜此方此事で御坐り升困



た困たもんだ。お醫者様の私に思う御座いました何の薬價と合て五百  
弗を差上まそら御勘辨を願ひたいもれで喜、五拾弗の五百弗は價揚  
成たぞ醫其の承知の出來んで最速代言を以て告訴致さんと急ぎ起掛る  
彌爾士太亞智の愕き止め彌是非よ及ばん千弗めて御低下さい醫然様さ  
と首を傾け仕合善と黙頭たり喜、痛い、疼い、醫困たもんだ喜、其  
及びません離ぞ醫者を聘て来て下れ二度痛の閉口だ醫、抽者が診て喜、  
其あいつ決して及びません、誰ぞ醫者を聘て、彌發明か醫者がいらつま  
やるでは無の喜、二度疼の閉口だ醫、二度疼どの何れ事だ早く其金を出せ  
出んと告訴彌告訴と仰せらるゝと胸まで痛う成まそと苦痛を忍んで金  
箱より千弗を取出し然も借氣又數ひわけ彌何か御受取下さい醫是の何共  
恭けあい兩人共風お當ての悪い外出も悪しと食事を断て寐て居る極良  
い何れ隔日よの見廻りませう喜、其よの及びません、疾の去ままたと痛  
さを耐い顔を皺めて言放て、醫、その其から其で種結好左様あらばと言

捨て後をも見せ老て出行るり彌、眼の目よ達たも千弗と云ふ大金を玉無し  
よ老てしまつた喜、痛い、疼い、何うまんだらう斯痛む管はあいと顔を  
皺めながら喜、實の氣の毒で堪らあい巨額を散財させ其上斯厄介よ成て居  
ての濟あいの家への歸れと困た何ぞ暫時助て下れ彌、其あよ心配そる  
よ及ばさい素より兄弟も及ばぬ中でのあいの僅の千弗の金の爲よ永々の  
交際を解と云ふ所存も無いお前も獨身であるし事そ下婢を雇て兩人合併  
どの何だ喜、痛い、奇妙だ痛いあ、頼む何の其して下れ痛い堪らあい、其  
ての己の幾ら永く居ても差支の無いあ彌、無いとも無いとも安心志て癒る  
の良いせ喜、猶更痛く成て來た其から己の財産を悉皆取寄ようか彌、幾ら  
財産の有るものか地屋敷で三百三拾弗三拾錢位もんだ一体お前の親父  
の極此、貧的で有る喜、餘り人を馬鹿よ爲るあ野郎め痛い疼い、引釣よの  
困る早くお藥殿のほしい痛いあ疼いあ此時以前の老嫗入來り姫、とんだ目  
よ達ましる大事あして居た三枚此前齒の悉皆欠てままい是のら腫脹る事



の成ません前様の怪我を成らせば妾も怪我を志ませあんだ彌貴姫の私  
を擔ぎ込めたるつたら私も頭腦の傷めませあんだ痛いと堪らん疼い姫未  
だ疼の除ません何れ亦か醫者を彌其より及びません姫其りや又何故か  
彌彼此か醫者に診てもらつゝも爲か飛だ目か逢ましむ姫其あら外此を彌何  
か其願ひまを實し心切様有難う姫何れ行て参りませう喜實心切か人  
も有るもんだ姫何致しませして出て行く痛んで堪らん熱の大層強  
して來た疼むぞ困た彌已も彼の老姫も義理の悪いのら痛むと言て濟しむ  
の段々痛んで來た様だ疼いの火此様お熱を持ふ姫湯死下さいか醫者様  
をか連すしませした喜伊苦勞様何の此處へ醫者か拙者の醫者でムる委細の老  
姫より驚と承知致しむ何うれ成る程大層眼の出まそ是の大變だ早く  
水を芥の擦込んである早く水を姫困處へ會合しむ水を醫者の水を以  
て陰囊此芥を洗ひ落し醫者是て良しい別な藥を上ませう彌痛いは痛い  
困た彌貴公も伊病人何うれ成る程彌六針程縫ましたの疼が烈しう伊座

いままで段々腫揚る様か心持の致しませ擦附藥の毫も効能のありません  
何えたるもんで貴公此も芥の擦附てありませ困た事を爲つた早く水を  
持て來て姫に承諾ました難か事へ手を出しむかへ水を醫者の早速洗ひ洗  
し熱々と打見やり醫者日と云て外も無い生れ附の儘ある縫日計りだ果  
て不思議か彌然て見ると彼の醫者の醫物でムいませしむか欺れませ  
定も残念だ喜残念だ残念だ千弗と云ふ巨額を欺れたんでそも此悲しい  
腹の立つ胸の裂る様だ涙が滴れる疼さの増も残念だ疼い醫今も藥を遣  
はませす其の誰ても残念だ眼追尾て捕へさせい彌喜此痛さよ歩けませう  
か残念だ醫是の違た直に藥を遣しませうと急ぎ病家を指て行く老姫の  
大か咳き言語迅まき姫彼此か醫者の騙偽どの世の中怖しい兼て名高  
いお醫者様で端兎蒙加留先生の診斷を願わんと思ひ門口迄参りし處彼の  
お醫者が來て診斷を乞ふから相憎先生の他行だから已が代診も参ろうと  
威儀を正して仰せらるゝ故悦で参りましたの彼の全く騙偽でムいませ



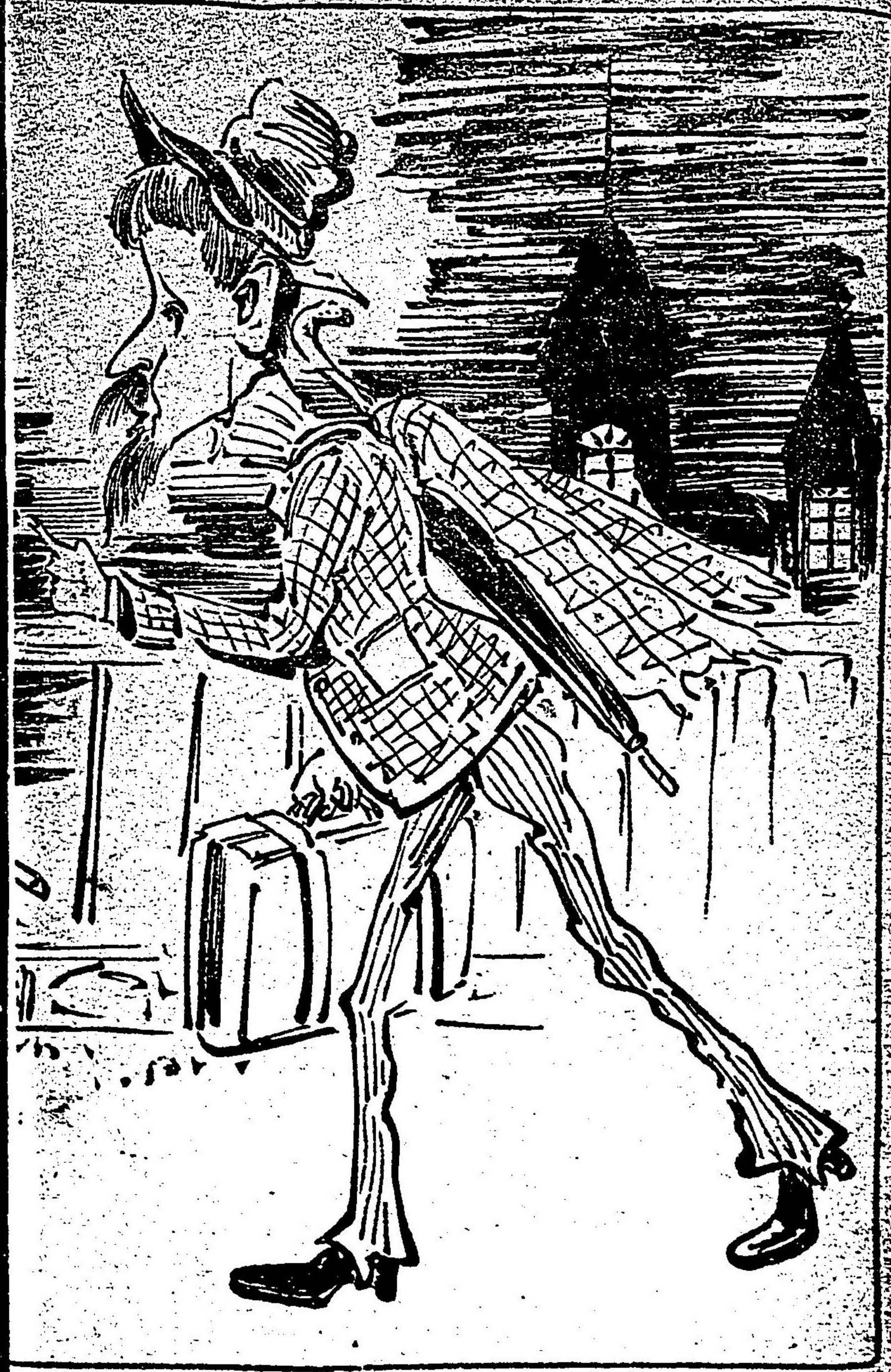
の濟ん事を致さました彌其あひ及びせん何も仕方お私ハ生來法廷杯へ  
 喚出さると言ふ人の評判を承ても取栗致しまと位でそのら彼れお留者よ  
 訟へられての大變だど一事お怖氣お起り遂々巨額を敷き取れたので外よ  
 仕方が有ません姫ハ左様で御座いますその時又貴公方御兩人て休お御不自  
 由でハ最速お懇のお入用でせうお妾お懇意の者て去方又居まそる娘て年  
 の漸々十八で容子の美極高尚お風此有る堀出者をお世話致しどう存まそ  
 の如何ていませうお彌爾土太亞智の眼尻を下げ涎を流し鼻息荒く老嫗  
 の方へ近く進み彌其の極々々結好で一体私のお懇を大事お爲る質て夜ハ  
 暖のお寝し盡の遊ばして置まするら其邊ハお徳用で何別段骨の折る用  
 事ハ有ません老嫗其口入ハお已ささい此男の春先此ね痛むんで話の  
 出来ぬハのお室も違ひ無しさ彌黙て居る淋病思め鼻ツ欠め然て老嫗一時  
 も早く煩そ升て遣らん痛さお是ハ誠お少もだおと五弗計りを與へけれハ  
 老嫗忽ち着聲おぬは姫是ハ是ハ有難う存じ升最速召連参りませう彌何

早う願ひたい然てお忘物おいませと齒お姫是ハ怖れ入ませと急ぎ一個の  
 娘を連れ来り姫唯今御約束の女中を連れて参りました彌駭いた足早お老嫗だ  
 未立た儘だお前の寝て居る己ハ萬端取極るおら喜そうる嫌お主人風を吹  
 せるお彌黙て寝て居る病人お起ると悪いぞ今お横死ぞ喜酷い事を云ふ奴  
 だこれも己ハ貧亡だおらだ金お欲いハくと泣出せ彌爾土太亞智ハ兩方へ  
 氣を取られ彌黙て居るハ只今参ります何故お前ハ泣のるハ今直お出迎  
 又無別品だろら何故己を止るおと振はあち急ぎ戸を開け一室へ通し  
 彌これハ眞お御苦勞様其お娘と申そのお連に成ましたお姫ハ連て参りま  
 した此お方ていませと彌これハ駭いた駭いも喜お公早く来て下れ腰お振  
 た起れおい驚たいハ駭いたハ姫何を貴公ハ其お驚きおさい升か彌老嫗  
 お前ハ別品だと云たてはあいの姫ハ申し升た又違ひありません貴公おら  
 見ると頗る別品又相違お無と云れて彌爾公大怒り傍此危を放り附んとす  
 る手を娘ハ確と握り娘貴主ハ何を遊戯おさいますと腕おつけられ彌爾





1925





公服をまわし其場へ驚る喜娥伊久の最前より窺ひ居て可笑さ堪ぬね吹  
出と老嫗の其聲を聞き此噪動を他方に見て居るを悪んで娘れさして居  
る花管此根で眼玉を突く喜、痛い！酷い事をするか老嫗の他方を睹てお  
る娘の漸々彌爾氏を介抱して娘「お氣を確めささいまじと抱き起す彌、心  
切お娘だか此様か心切者を輕視たの私の悪い老嫗赦して下れ娘「そうお  
心の直れ、妾しの嬉うふいます外お話の無い左様から彌「行てしまつ  
たの氣の早い老嫗さんだと言つゝ四隣を見廻し腹の痛い最少し下だ痛  
い！壓いて呉れ、痛い！娘「此處で御座いますぞ

第貳回

喜娥氏の眼玉の飛出る程強く突かれたれど大聲を揚て怒鳴る譯も無い  
痛さを忍んで居たが老嫗の歸たと見へ聲がせね、氣が揉て堪らぬ又も戸  
の隙間より覗き込と彌爾氏の娘の腹を揉せ居る様子あり喜、酷い奴が最  
う許難が極つたと思へて何の怪しき事として居る但おまれた奴だか女も

女だかんの醜男よとさつて居るとい變な女だ少しも顔を此方へ向んら容  
子の分らん何だの已れ方へ落とうだ何だそろく變な成て来たぞ彌、お  
前此名の何と稱かへ娘「志体弗彌「何だ志体弗其の手を最少し下へ遣て揉  
で呉れ然も右此手で已の首ッ玉を抱きまめろ娘「嫌で御座います彌「已の  
寵愛てやる早く抱けよ娘「何も嫌で御座います彌「嫌だア手前の面を見る眼  
の何處も有る鼻が蒸氣此烟出の様だ其大口で嘗られてたまる者も然し  
已の寵愛てやるゐら斯しると既又大事も成る處へ喜、鼠の鼻が鼻々い彌爾  
氏の驚き手を放し彌「喜娥公お前の悪へ處へ來な病入てあいか喜「大を鼠  
の鼻々と思て來たそこ居の誰だ彌「是の召仕だ志体弗ヤ此男の已れ居  
候だ性の悪い用心まきよ喜「そんな事を云ふもんでは無時彌爾公お前の  
知て此通り己の借財が多いら家お居れあいな前ら己の金を借た積て  
彼の財産を悉皆賣ての呉まいの外の借財のこまるしてしまふ彌「聞いた  
是のお前の一生の智慧をまぼり出した妙策だ早く其してやろう喜「今日



前行て取前つての呉れまいは是非頼む急であければいゝんて彌其や困た  
 己の少し用が有る喜外へ行くのか彌少し宅も居て用が有る大事を用だ  
 喜宅も居て済む用から綜合して己の方を先に頼む彌困な仕方が無氣よ  
 掛るさアお前の室を出ていゝんぞお舞やお前の室へ行てはあらんぞ娘  
 己のしこまり升る喜窮屈な事を言ふ奴ださ彌行て来ようと起上り耳を  
 故て手を拱きて行と居る喜娥伊久の獨り寝床も在て語るや喜過刻彌  
 彌公の彼れお舞をせしめ様と前もあわあかつた迎も彼れ無益だ己  
 の口説ばいかん事はあいと獨り黙頭き室をいで四隣を見廻し戸を開けバ  
 彌彌士太亞智の手を拱いて行と居る喜娥氏大聲よて怒鳴つけ喜何だ野  
 郎め己を欺たお失敬千萬お奴だと拳骨よて擲る彌怖れ入た許せ恐あつと  
 許せ喜お前の何の爲お此處お居た彌お前の彼れお舞よ手を附るぶろうと  
 思て喜馬鹿をいへ早く己れ義務を果せ酷い奴さ彌是の恐れ入た直ぐ行く  
 頭が痛いと言捨ておと振回し振回し彌痛い膝蹴いて轉んだ喜腹を見る

早く行け彌承諾りました二里もあるら其早く行て来れさい喜否お食  
 客は彼の食客だよ困る奴だと戸を閉る志体弗の始終を傍て聞居る喜  
 舞や彼男の否お奴だお食客の彼者者困る時お舞やお前の可愛娘だお  
 無理を言るお可愛そうよ志体弗の顔を紫色あおし女揉め揉めと仰まや  
 いました喜揉んだ女揉ました喜何處を女お腹を喜其下ではあいら女  
 下下を下をと仰まつら下よの腹のあいら不思議に思ひました喜違  
 ひあいら其だお前の利口者だお女有難うムいます喜あんと己の女房も成る  
 氣はあいら女若し其から嬉しいか嬉しいか嬉しいか嬉しいか己の餘程色男だ  
 約束を定めお外亭主を持って成んよ女其お浮薄でありませんよ喜こ  
 れの証憑ぶと鍍金の指輪を與す女これの金ださ嬉さい喜然しお前のお舞  
 の身分己の此家の主人だら今直ぐ結婚すると外聞の悪い内々夫婦で居  
 て退々も場合を見て仕よう女夫婦でさい有て可愛あつて下されバ外お何



も望のありません 喜其の可愛い娘だ彼處へ行こう 女参りませう 喜良娘  
た女此處へ寝ての勿体ない 喜お前もんか已れ物ではあいてのあい矢  
張己の女少し痛を升 喜少し忍耐ををしよ 快だろう 女驚いた誰か  
来も様で御座います 喜誰の来も様だ 彌今歸た喜娘氏何處も居るお舞や  
早く来い女直ぐ参りませ 彌これの途中で買て来たお前に遣と思ふて何  
だ彼處へ行くかと言附たてあいる 女貴主のお歸りまで掃除をして美麗に  
しておこうと存じまして 彌其うの能氣の附た女有難存じます大層美いと  
と彌喜娘の何處も居る 女多分お床でございませう 彌そうる喜娘氏喜娘氏  
今歸つて来た喜餘り早のつた遅い方が却て已れ爲あよかつた 彌途中ま  
て行て餘り心配の胸へ突登つて来て仕方ないのらまづ今日の歸て来ふ  
のだ喜そうる最う宜志い己の近い中に取極る 彌何だお前此寐床も花替の  
有る誰の女喜これか 彌そうよ喜これの 鼠が引て来たのよ速ひあい 彌お  
舞や是のお前のて有うらさ 女左様でい 彌いよと離る歸りる 彌偽だろ

うお前の喜娘氏寐床へ匂込だる喜娘のお前を引込んだる此二ツも速ひあ  
い女参りの致しません 喜そんなお堅索しあいでもよるろうお前の一休  
お舞お氣でも有て此事か止の宜せ 彌此野郎彼此肩を持つお助倍野郎 喜何  
故其も又怒り散すれだ 彌今お前又遣た物を斯へ持て来い最う遣の嫌だ  
女何故お嫌も成ました 喜一體お前の遣も物を取返そと云ふ法の有るお其  
の返さくつて宜しい 女有難うムいます 彌このつア怪しいぞ愈々以て怪  
しい 喜嫌味腐も事を云せに酒でも飲で陽氣も志よう 女其も其のようは座  
い升ねい 彌そうさお胸が恐くつてあらんと大扨で續け飲まお飲む 彌大層  
酔て来たを面白く成る 喜己も少し飲う 彌其のいかん高價い酒ぶ食客のお  
前も飲してままるも此の 女喜娘様の食客さんですか貴公の食客さんでも  
あ 彌馬鹿を云へ此男の食客だ一體此男の財産と云ふも此の高く買て五拾  
弗位もんだ其も事お依ると人手お渡るも知れん取果おき身の上  
其を己が助けて家へ置のだ 喜より悪く云て呉れるお頼む頼む 女そう



て御座いますか酷い御方だ彌酷い男だとも何とか言て欺しもう志休弗  
の燃起つ胸と誰かそ涙を押蔽し女妾の御主人様と存じて居ましも彌其  
の真違だ。十時の過る寝ると志よう喜其の良い彌馬鹿引込で居る志休弗  
の欺されたのが口惜く隙のあれバ思ふ存分云て遣ふと俟構いたれど喜娥  
伊久の室よれと引籠りて逢間の絶てあざりけり

第三回

志休弗の明暮涙乾く隙なく二月餘りを経よりし或る夜お人跡を  
を怪しと思ひ居る間、寐床へ匂入の正しく喜娥伊久と思ひ女何の御用  
ていらつ志やいました彌少々頼とぬい事の有て女明日篤どお話中志まそ  
あらお歸り下さい聞へるといけません彌聞へる氣遣はぬ彼ハ寝て知  
らん大丈夫だ女あまは何誰でぬいませぬ彌已の已の矢張已だ女喜娥  
様でそか彌そうだよ女お前の餘り酷ひ妾を欺そも程の有るお前の此家  
の主人と云ふじやない後で能く聞けばお前の食客で彌爾士大亞智さん

お御主人あそうだ食客の身分で何して妾を女房よささる氣だ自分御の  
始末が出来んくせよ度々お前と忍び逢ふ爲め子を宿して二月と云ふもの  
の月の経を見ぬ何うして下さる氣だい量見が分らぬいではぬいぬ彌  
其あふ心配するよ及ばぬいよお前と一所何處の田舎へ行て苦勞するも  
厭わぬい何かにして暮せるわ女そうのへ漸々安心しぬ姑く顔を見せ  
ぬ故氣が變ふと思ひ欺されぬのが残念でありましぬ。そう事の極れバ妾  
しや嬉老いと志のつく彌爾氏の可笑さ押蔽し彌嬉しいぬ女始しう御座  
んすども其より後の聲ぶお洩れを鼠あく音を察しける彌爾氏の喜娥の聲  
音を遣ひ首尾よく本望を遂げ勞れし儘お夜の明るをも知らで寝より喜  
夜の明も起ても宜ろ。彌何も眠い春先の能く寝られると又も前後を知ら  
を高野志休弗の能き機會ありと打黙頭持る撮鼻輝を取出し女これの貴  
公の昨夜お忘れお成ましぬ物で御座いますと餘り汚穢で居り升れば洗濯を  
致しまさよふ喜そんな物を忘れて置て来た愛はぬい偽をつけ女偽どの駒



怒ぶ昨夜も前が怒んで来るから思ふ存分日頃此怨を並べると已の  
 お前を捨る氣はない何か苦勞をしても厭わぬと言たであいか喜の  
 いも少しも知らん最疾に病氣も快く成たが再發するといふんと思ふて  
 んで居る處で女偽をつけ人を欺さぬ程があるお前が此家の主人と言た  
 の妾を欺そ手段お違ひないお前の全体食客の身て何して妾を女房おとる  
 積りの量見分らぬい妾の身の遂々お前の胤を宿し最今月で二月と云ふ  
 者の月の経を更え見ない斯成ての恥も世間も顧まぬ身の成行ようは法定  
 をして下さいます此時彌爾士太亞智の騒々しいのに眼をさまし可笑を堪  
 へて寐るふりをさし居る喜其の己が怒つゝの昨夜怒んで行ふの決  
 して已ではあり外は様子の有りそうも事だ少しまてと心中大に怒氣を合  
 と喜これ彌爾公起て呉れ起て呉れ大變な事件だ彌、眠むいかな何事事件だ  
 喜お前此撮鼻揮は覺の有う彌、己のてはない其の手前のだ喜偽をつけお  
 前のは違ひないと云ふお前無理な夜具を刺ぐ喜此力や勝りけん彌、己

喜己が何しぬ彌己が怒るうゝつた其撮鼻揮の、お前、己のだ  
 鼠が引て来るの、違ひない喜偽を偽け鼠が前のお前を引くも  
 んの人を馬鹿おまやアがる早く白状してままい彌實は昨夜お前の愛嬌  
 と知れぬ匂込んだら首尾能くおめものよ其時忘れぬ撮鼻揮は何のお前  
 盡力して波風立せよ濟して呉れお前も腹が立つお前を欺して呉れは喜娘の少  
 し小聲も成り己の關わぬいお前が大腹立て居るお前甘く欺して呉れ  
 お前の主人の事だお前必承知するだろう己の言事ハ眞實と思んぬい  
 困る彌其で己が一談判しようとお前眼を細くし笑を含んで彌志体弗や  
 前美娘だ彼の喜娘は昨夜忍んで一行あるつゝも確か証憑がある疑ひを  
 一晴そが能せ女残念い残念い誰で有たろう欺されたのが残念い彌最もだ  
 最もだ早く其當人をさめせ女其聲も能く似て似た此撮鼻揮ハ貴主れ違  
 ひない喜違ひないよ可愛そう彌實の己が怒んで行たのだ女残念い口  
 體いと一目散に表街へ飛出し女お婆さん早く妾と一處に行てお呉れ腹



立て成らんと始終此事を委しく話せば老嫗の大に怒て入齒を嚙しり足早  
 ん来て戸を叩く喜已も酔い事をいふお前も酔い彌最う仕方がない喜  
 困た女だ何處へ飛出して行たろう彌誰の来た様だせ黙て居よう喜  
 はいかん已が行らと一室を出で戸を開けバ彌一寸彌爾様もお目お掛り  
 どう存じませ喜彼處へ嫗御免下さいまし彌爾氏の赤く成り亦青く成り  
 心配して居る嫗貴主の此娘を酔い目お逢しおすたそうですな彌出来  
 心で老嫗の亦喜娘の方を振向きお前さんの食客の身分で譯も分らぬ此小  
 娘を黙し込んで胤まで宿させるどの全体何云ふ御登見でとへ喜出来心  
 で彌同じ事はあり云て母があらんお前行てお親父様を喚でおいで彌爾氏  
 は喜娘と顔見合せ彌困たお何志よう喜黙て居る妙策がある親御免下さ  
 い是は私しの娘で種々御厄介な成まして有難う存じませ只今聞ませれば  
 御兩人よて娘をお黙しおされたるよし最取物おされては取取の成升ぬ只  
 た一人の娘で御坐いませ終身扶助をあとつて下さいまし何も困りませ其

お取物での仕方があるません其共お引取下さるる何れとも御挨拶をお俟申  
 志ませ喜彌爾公困たもんだ彌お前の何する氣だ喜一寸來い彼處へ彌何の  
 甘い考の附たの喜仕方ないのら兩三日と伸よして置て其中は此財産を  
 賣却し逃亡どの何だ彌お前の財産の喜已のも其する彌是は妙案だ妙々奇  
 妙だ一談判しよう起立り彌お親父さんへ私共の表向こそ少し目お立ま  
 その内幕の一文おしと云ふ貧亡者で御座いませ兩三日中お何どの方法を  
 立て終身扶助致ませら御勘辨願ひませ喜何の願ひます何の親そう  
 話の極れば娘を連れて歸ります後日此爲お證書を一彌取かしの元來無學  
 て親貴公の喜私しも親困つた實の私も無學で然し老嫗娘の聽人だの  
 ら何れ其中参りませよう彌左様から喜何と已の計畧の那破列翁徒足だ  
 怖れ入たろう彌誠又怖れ入た喜是から已を尊敬しろ彌馬鹿を言い時よ  
 逃先の何處とそる喜日本近頃大層開けて内地雜居の許されて行く行く  
 濡手で粟を掴む積りで惣張連の皆日本を以て金庫と思て居る様子ぶ已等



も行って利益を得ようか彌お前よの無益だ喜處が無益でもない已て澤山だ眼  
 の利て居るを彌其日本とい何處ある國だ大概南洋の群島で無い其  
 あら己の嫌だ人を喰ふそなた喜困た男だ日本の支那の東魯國北部の南方  
 へ在る島だ大丈夫だ已と一處へ行おう但し入費の或前持た彌何志ろ此處  
 の居悪く成た行くともよと談判忽ち一決志氣早の喜娥の両人の財産を  
 賣却し持たる金の三萬弗ふれを別々封じ旅の仕度も身輕よ造らへ喜  
 明渡老た上の二度と此家へ入る事が出らん彌二度と此地へ歸る氣のみ  
 喜彌出立志ようど小舸へ乗んとする時彌お前方の人を欺とも程の  
 ある喜大變だ退手だ老嫗だ彌關うもんかと言ふ中老婆の草袋を捕ま金  
 を渡せ早く渡せ彌此草袋の中金の澤山ある皆渡してたまるもんる老婆  
 の一生懸命の草袋を奪て逃て行く彌不運の積くも喜困たもんだ彌然しま  
 た金の有るら大丈夫だ船頭早く急げ二人の本船へ乗移ると流笛遠は陸地  
 を離れ駿々として奔る彌金を勘定しよう喜そなた幾ら取れた彌多分四五

弗入れて有つた喜四五弗だ草袋と合して拾二三弗の物だ安い女で有た  
 一個前六七弗も當る彌お前の先をしめたゝら高い船が動揺して來た  
 そ眼を廻る吐く氣味の有る腹が痛む頭痛をさる其だから船の娘だと言ふ  
 たのだ喜馬鹿を云い船へ乗せ日本へ行る彌段々吐く氣味のある喜  
 喜吐たぞ彌喜喜已も胸が變つ成た喜喜喜苦し助けて  
 呉れ死よ！そなたア水夫をあげました彌喜喜喜苦し困た

第四回

彌水夫さん未だ横濱への着きいか水未だ十日餘りもありません彌娘も成  
 た歸ろう船を廻して呉れ其あ事の前成させん彌成んど言ふ法がある喜て  
 れ黙て居る十日位の直ぐだ彌忍耐しようの船の駈々として十六日として  
 横濱へ着きたり彌うつゝのりの上陸あいぞ喜何故彌喰殺されるぞ喜其の南  
 洋の蠻島だ日本少し開けて居る喜其ての安心喜安心ども彌上陸志  
 よう疲勞たど小舸へ乗て上陸し船賃を拂ふ一個の生書手も大なる洋杖を



白地の單物を短く着て、帯を締め、  
 「何處へ行くぞ積て此方を通りあるか彌爾氏の振廻り見て大い驚き彌  
 色は黒い男だ喜「一体熱帯人種と同一か彌「そうも知れん喜「I am tra-  
 vellers, please take me to the railroad. (私共の旅人で御座います、  
 旅車館  
 案内を頼む喜「By what train do you go. (何時の御出立になる)喜  
 「By the seven-o'clock train. (七時出立致しあなた)喜「You have no time  
 to lose. 喜「驚いた、七時だ彌「最う七時だ困る喜「If you like, we will  
 take carriage. (宜哉、さし車を乗せ参りませよう彌「Yes, sir. (其う致さ  
 せう喜「make haste. (早うお入りなさい喜「Yes, here is the signal of  
 departure, enter quickly (早くお乗りあがり出立のめひつが致しませう)三人  
 大急ぎにて停車場より到り書生の萬端あよくれと無く世話をやき漸々時間  
 のあゆみあひ直り二人の涼車に乗る喜娥彌爾氏の大い喜書生の爲め便宜  
 を得たれば、懐中より拾弗程を抓ると出し書生と與ふ書生の大悦こびひて

高島町の方を指して急ぎ行くの目的有ての事あんまり喜「此處の書生の話  
 した新橋は停車場だろ彌「其お違ひない喜「そら車が停た下りよう彌「己の  
 最歩くの嫌な成た喜「困る早く下りろけんつくを喰ふぞ彌「困た、手を引  
 て呉れ喜「嫌な奴だ時銀座と云ふ街の何處だろ彌「何でも馬車道よついで  
 て行けば良と云た喜「成る程急げ急げ思つたより百倍した圓太郎馬車の  
 後より来り毛唐人浮雲い雲浮い喜「後ら何のが来た彌「あれ何だろ喜  
 「馬車の様だ彌「眼鏡を掛んと浮雲あいな記てある彼が宿屋の茶代屋お違ひ  
 い宿ろうていさい喜「早く這入れ主人迎出て主「能くいらつまやい  
 ました兩人の少しも言語が解らまごまごして居る女「彼處へお出下さい  
 と指さしする兩人の漸々驕り興へ通り座敷へ座る彌「何も言語の通せん  
 ぬの困るもんだ喜「實に其うだ是ら日本語を學んで漫遊とておけよう彌  
 「其さ賛成だ今来た女の色が白い能く志体弗に似て居る喜「最う後悔々々し  
 た助倍を出そののよせ少し語を覺いたら金を出して公然立て置れる芳原



と云ふ處へ行く方が良いせ喜お前の能く知つて居る喜己の朋友で民能  
 弗と申そ者が以前日本へ来た事が有て委しく談話を聞た事がある彌其  
 の早く行き度成た喜馬鹿を云へ未だ語も知んで何の面白い味の有るもの  
 る彌實み其だ違ひさいと是から一心よ日本語を勉強する喜日本語の何も  
 不規則で勉強する骨の折る其上毎月多分此金を取れる此の惜い彌己の  
 最今日限り語學の止て實地又附う喜己も賛成だ彌是ら吉原へ参ると志  
 よう喜服を眺へて何だ彌少しの美麗よせせ成まい手を拍て下女を喚  
 ぶ喜喚鐘のさいの不便だ下女小聲よて喚鐘のある蕨旅へお宿變を願  
 ひま...と女...お喚あすつたの此方でも彌着物頼...ひ着物造う入こ  
 い銅瓶持てこい女洋服屋の解りましたの銅瓶どの何で彌銅瓶お前知ら  
 ん女...異人さんの言事解り升ん彌銅瓶湯を冷しくおさい者女...湯沸しで  
 その彌...何故湯沸し鉄瓶何よ女私しよの解りませんの彼の湯沸しと申志  
 まど...承りました彌是だから不規則の様だ喜實骨の折れる女只今

洋服屋の参りました喜解るさい主人の入交り来て主着物裁縫る人参りま  
 した喜解るました此處来る主...のしこまりました服...御免下さい喜誰の  
 服着物製へる者で...いまだ喜此男のを寸法服...是の驚いた私しよの何も  
 喜私し日本少し言語解るさいそろ...服...何...う...も私し拙外...彌何故  
 服寸法...の取ません彌宜しい彌爾氏又主人を喚んで彌日本拙着物よい  
 人主承りましたと二楷を下り主困た彼を体で洋服の適もんの瓢のお化  
 だ裁服屋で...の御用の此方でもの御免下さい彌着物縫ふ別人裁...左様で  
 喜此男着物洋服屋の腰を潰し驚いた而地よて裁承知致しました此品で定  
 價の五拾八圓で御座い升幸ひお長が短いお安く参り升彌明日晩裁  
 「承知致し升た喜私くし幾つ裁...能くお似合おさるお兩人連だ貴公の  
 此品で五拾五圓で幸ひお瘦の方でもからお安くお参りませ是で肥て居た  
 ら大變だア喜明日晩裁大層急ぎアがるナ...承知致しました彌日本の裁縫  
 家の極拙だろ彌其のさ以前の裁縫家の何の解らぬ文句を並べて述てし



まづ九翌日晝過ぎ頃裁「御免下さい御調の品を持参致しました彌「其う着てと着て見ると袋の中の鼠又似たり彌これ拙直と裁「ハハ喜私し着る一これヶ裁「ハハ只今直して参りませ喜「宜志い暫くして裁「御覽下さい兩人着て見る彌「此處ヶ喜「此處ヶ裁「ハハ只今凡そ一時間程過ぎ裁「持参致しました喜「仕方かい日本ヶ彌「ヶ澤山仕方かい裁「代金を頂戴致しましたよう彌「幾ら裁「都合で百拾三圓で彌「百圓まける裁「困りませ彌「これ百圓裁「外の店と違ひませ彌「これよろしい私し此處ヶ日本抽と兩人の洋服を突出と知らん容子して兩人で話合ふ裁「困りませ何と云ても聞入れ裁「仕方有ません百圓でおまけ申しますよう彌「これやる裁縫者の直み歸る彌「是ら直み吉原と志よう喜「行うと兩人車に乗りガ、彌「車まで車「靴店お行て彌「ふれ幾ら番「五圓で彌「長け番「十二文九寸六分で彌「ヶこれ番「それ靴店のかんばんで彌「これ立志いと言あがら取て穿く番「其十五圓で彌「高い番「お安う御座い升彌「少し高いと懐中より十五圓取出して波を番「

彌「何ありませ番「有難ういませ彌「馬鹿々々直し車に乗て芳原大門口お到り彌「幾ら車「ONE DOLLAR 彌「これやると一圓札を渡そ車「熊公今夜の旨まく遣た一盃やろうと傍れめし屋へ入る後ら生酔の畜生三人來り「米倉毛唐人お話をしろ能い事有るかも知ん米「僕いかな黒澤君やらんの黒「僕も無益な未だ洋學を初めて漸々二年だ米「水口やれ水「黒澤お頼まうジ、黒澤某しの兩人お賣られ黒「やつて見ようと彌爾氏の傍へ寄り黒「Yell ..... YOU ..... GO ..... WISS (此處へいらつまやいませ) 彌「吉原別品買い米「日本語の解る日本語でやれ彼處へぶちあける水「黒澤旨くやれ僕等の金の無い姑く攻撃を試みんだ、ハでわがれ自分計り旨くやつてはいのんぞ黒「貸公日本語い彼の家別品澤山喜「これ堪らん早く買う彌「已も堪らんわがろう黒「私し案内する番「御一處様でいませ、黒「そうだよ番「お客だよ禿「ア、都合五人の二階へわがり米「麥酒の極上等を持ってこい價段よの關のんぞ黒「西洋菓子極々上等を持ってこい外國人だか



ら水「西洋料理極どびきりと云ふやつを出せ價段よのかんまん今夜の金の  
 餘る程あるぞ輕蔑志つちよるとびんたわ打ぞ番「承知りました水「俟て番  
 頭何でも澤山出世是の如前へ遣る番「ありたう只今其より藝者の六人女  
 郎の五人其他油蟲など都合二十三名の大一坐黒澤水口米倉の三人の類お  
 酒を喜娥彌爾氏と進め兩人の大酔する三人の書生の旨く機嫌を取て總  
 頭廿三圓を出させる喜娥彌爾氏の夢中に成て金銀をまきちらそ黒澤の小  
 聲にて黒「旨くいつたあ米「實よ君よ限る才子だ水「おどらんあうたうぞ酒  
 を飲め飲め！酒を飲め！酒を五大洲置て酒を飲め旨のッらう彌「私  
 し寐る喜「私し寐る黒「助倍お毛唐人だ水「御両君俟玉へ女「まだ早ういませ  
 最少し召志上んおまし嫌おぬんちんだよ口を汲つもりだよあきれが  
 つう！だね喜「愛婦此處へ来る女「何てムんそへ嫌だよ股脚へ手を入よう  
 と爲るよ入させる人の外に有りませア黒「如何お充分よ日本語が解んちう  
 て其お悪口を吐くのいよせ水「いお赤ちやん彈んの皆お弾け弾け！髯の氣

よ入る様よせんといのんぞ藝者の一生懸命よ持たる撥を置く間も無く機  
 嫌を取るの金力此勢ひと外の眼あこそ見られぬり彌「皆お踏る皆お踏ると  
 夢中よ成て踰限はづみお二階の欄干より真倒まよ落れれば二階の陽氣此  
 大さはぎ下つての驚き人が降て来ぬれの妙だ天人を降せたり彌「眼の裏  
 ぶらぶらお客が二階から落つぬ早く二階へお連れませ藥を上お禿の驚き二  
 階へ来り禿「異人さんの落つぬ離の来てくんおまし喜「彌爾いさい彌爾いさ  
 い大勢漸く二階へ擔ぎあげ下男「滅方肥お男ぶおアと降て行く喜「何うしよ  
 痛むの困ぬお前よの實よ困りきる彌「並此者より重量が多いから一時の  
 眼の廻るの最快い踏る皆お乱痴氣さはぎを爲そ中よ時此進むの最と早く  
 仲「最一時お近ふふいますお床へ皆様只今ありのア藝「おあり！何うの亦  
 ……水口さん何うの亦！米倉さん黒澤君さようあら宜しく懇張連の一同よ  
 座敷を去る仲「佐瀬原さんお前のお客の肥た人だよ金有さんだ大事おあし  
 ち佐「お驚いぬ幾ら金で賣る身ても彼お異人さんに見れるのハ腹裏々々



するんぞますよ、聞てお呉んまましき佐瀬原さん妾のお客の彼の姿  
 だどお見んさんし身の長が七尺もあるし鼻が何處もあるだろ、眼が影  
 る成て暗くつて玉が見へ無んぞましよ榮螺の壳の様に、頭が福祿神さん  
 に髣髴さまそよ、佐瀬原さん高雁さんの云いんを通りさまそよ、此時仲どん外れ  
 座敷へ行く高雁、彼を嫌お客の振てやんまましお妾も振りまそよ、佐瀬原  
 さん今夜の様に間の悪い時の權入さんが来て半分言せお高雁た親指あて突  
 く高雁、妙お處でお痴話此時仲どん大聲あて、仲高雁さん佐瀬原さん異人の  
 客の大憤お怒て居るじや無る耳がいかへ何を遊戯て居るんだへ大概お  
 おしよ御主人の大金を出して買たお前方で、無いるへお客を粗末おとる  
 と御店よかおわるよ、其時やお前方の腹の痛くおかるうお親方さんの何お  
 め苦勞おさるる知りやし無よ、早くおやすまよ、小便よて高雁、いつもの事じ  
 やと思しめし先づ々々座敷へお歸り、佐瀬原さんお参りんさよう高雁、お

第五回

屋敷土太智の彌麻の園此中よて大怒り、彌女何故女何故私し、佐瀬原  
 の甚助お驚いた甚助が聞ておきれるお前の面を御覽よ、御覧を貸うか、様お  
 香だよ、牛の様だ彌爾氏の何の事やら解らお、彌愛婦よく来たお抱きつく、佐  
 瀬原さん腹の痛んぞましよ、此處の痛いと顔を皺める、彌悪い藥買うと二圓札  
 を渡そ、佐瀬原の好き機會と藥を買う積で、外の座敷で寐て居る彌爾氏の首  
 を長くして、佐瀬原の来るを俟つみと二時間計り、彌爾氏の不審晴やらお顔  
 お手を敲く、仲高雁、何れ御用て、彌女來ん女來ん、仲高雁、只今と佐瀬原を捜し  
 仲高雁、お前我儘じやあいる商買を大事おとしよ、怒て居ら、佐瀬原、今  
 り升と困り果てお床お入る、彌愛婦おんべい宜しい、佐瀬原、これ如何、佐瀬原、  
 い痛い貴客彼方向へて呉んままし彌爾氏の已を得お背を向る、佐瀬原、一寸  
 小便へ行って來ん、おら俟て居てくんおましと出て行たきり來らお彌爾氏  
 の大お怒て三枚蒲團お上へ小便を垂流そ、此時夜の既お明たり、是より先き  
 三人の養生の好機を窺ふて床お入るや否や、歸りたり、黒目くやつたお水、



最少し寐て居ても宜しむつたろう損をした米馬鹿を云い彼の兩人の果報者だ一處も朝まで居たら尻を割れるら早く歸たと談話高々日本堤の方へ行にける跡は喜娥伊久の書生の歸りしをも知らせ二時頃より女や來ると首を長くし俟ちたれど來らぬ幾んど五時成りけり喜居ぬる居ぬる仲どん眼を擦りあがら仲此方てどの喜女未だこぬペク澤山仲只今わけまそ高雁さん高雁さん高何てと仲困る子妻の何あも困るの知りやしあいや早く行てあわけよ能く世話をやのせる子高誠お濟ません救して呉んあまじよ喜娥の悦び眼尻をさけ愛婦能く來た寐る宜しい高妾い今大便も行て來んそのら俟て居て呉んあまじよと出て行たきり來せ夜に還お明たり喜娥の大よ恐り仲どんを喚ひ喜書生居る仲最歸りました喜主よべ仲何の御免あそつて喜主よべと云ふて承知せせ仲どんの大困難主人は會て斯と告げの主人も大よ立腹して嚴しく娼妓を誡め喜娥其罪を謝それバ益々怒り喜私し金六十弗費た高い半分まける主何も困た事お成行ました

御勘定の處を御勘辨を喜娥の更お承知する様子無く若者共の外人の怒り物言を奇しく思ひ障子としお聞居たり喜彌爾喚べ最明た仲どん彌爾氏を喚來る彌已此處への女の一ト晚來あいは是で六拾弗餘り費たのの残念だ談判を開け喜みれぬ主人だ己の今喚出しも處だ書生の最歸つたそらだ彼等三人の己等を種よしたに違ひ無い恐む可き奴だと頼み談判を開く主人の困じ果て半額三拾圓を返さんとする此時仲どん入來り主人よ言やう仲此お客の夜具の上へ小便をしましぬ其の返さあいでも能うムい升よ主何よ小便を悪い毛唐人だと言あがら彌爾氏を連てもどの室へ行き實否を糺そ遂まかくし終せせ私しまました立居し若者共も其れと言より早く引倒し若奴悪る遊戯をしやぶつたあと拳骨まで大勢あぐる喜娥の此物音を聞きつけ飛で出て彌爾を助けんとして若者共も抵抗を衆寡敵せ遂々二人の負と成て戸外へ突出さる喜一体お前何したのだ彌血が出た痛いあんまり女が來んら腹が立つら小便をしたんだ喜何處へ彌寐床へ痛



いー喜其じや前が悪い斯あつたらん目も逢た事もない恐らしいまア  
 と彌爾の背中央をうり彌痛いお前迄ごと兩人つふやきあがら田浦まで来り  
 見れば西洋料理の看板あり喜頗る空腹も成たの喰ようてい無る彌己の  
 体の痛んで堪らん先へ行こう喜其事と言きに一處おやろう彌仕方ある  
 いやろうと二階お登る女お相増様料理の未だ出来ません鍋から直さしあ  
 げまそ喜宜しいと更お言語の解らねど注文したり女「麥酒ハ牛を喜是ハ  
 妙だやらんか彌「やろう喜娥の急ぎ四五片を一度お頬張る喜熱い熱い  
 熱いーと苦しむ若しみあがらも空腹あれば飲込んする喉お塞へて喜  
 ンと眼を廻わし後又倒る彌爾の驚き水を飲せんと爲れど水ハ無し有合ふ  
 麥酒を取て口は潤く漸くよして息吹き返し喜己の口中へ何を入た焼燵れ  
 て居るまゝとて痛い酷い目も逢た何も運が悪い彌其だ最國へ歸らう喜  
 つて見ろ亦酷い目も逢ぞ彌成る程喜己の最口が痛んで喰い断食をせ  
 ざア成まい何だる變お香のそるぞと四隅を見渡せば彌爾の背中心火の附

て居る麥酒を濺た報警をとらんと思ひ知らぬ振して喜己の鼻がわるいの  
 だ真違ひだ彌「お前の鼻の何處もある最己の体は痛まやんだ一喰よう  
 と故と喜娥お見せて喰てある喜娥の可笑さ遣方かく障子を明て風を入る  
 風の勢ひや強りけん一度又敷と燃上る彌背中心火事だ消て呉れ助て呉  
 れ喜熱いお彌早く助け喜娥の得たりと麥酒を洋盃よつぎ四五杯背中心  
 掛て漸く火を消す彌「痛い志みて痛い昨夜ハ六拾圓損志て赤服をだ  
 ちしよ志る痛い染る此物音を聞附て下婢が二三人走り来り女お醫  
 者を喚ませう喜醫者頼むお前背中心ら腹へ掛て大したもんだ能く焼  
 たお彌何を言ふか醫「御免下さい私ハ長崎貿易と申しませ醫者でん  
 ますお怪我を爲つたぞうで成ア程大層劇熱を特發志て居まそ喜解る  
 ち「醫「You were wrong, for you seem to suffer very much now.  
 (貴君ハ悪るものつた今大層悪るい様も見へます彌「Not very well. (何もし  
 けせん) 醫「By taking good care, it will soon recover. I will prescribe



For you directly.

と歸り行く喜直は快くあると言ふた。ら大丈夫だ彌痛い、困る服を調らいた。いもんだ駕旅へ書面を出そう。此趣きを報知せよ。悪い喜其うだ人を遣ふ。以前の洋服屋を喚んで調へる。服實に困つた厄介な身体だ。洋服屋泣せだ。喜貴公何お服へ左様あらと歸る。入交りも駕旅の主人が見舞ふ。來たり。昨夜お歸りな。いません。らお案じ申して居ました。が飛だ。い怪我で。ムい。ました。彌私し昨夜芳原六拾圓打れて歸る。此處焼く。主其何しろ驚いた事。で。ムい。ます。早く快く成てお歸りを願います。三彌三三日居る。主何う願ひ。ます。左様あらと歸る。彌爾の漸々全快して。以前の駕旅茶代屋へ歸る。彌少し腰の痛い。困つた。喜醫者を喚ばう。女日本よ。按摩針と申そ者。がござい。ます。節々を揉むので。大層快い。心持。成り。ます。喚びませう。彌其さ物。の。試。した。喚んで見よう。喜奇妙だ。やつて見る。彌私し頼む。女。の。し。ら。ま。り。ま。し。女。姑くして。下女來り。女按摩さんと喚んで参りました。彌此方へ喜此人女。

眼ヶ女、替てムい。ます。按摩の類。彌彌爾の肩を揉で居る。彌私し此方痛い。よ。と。按彌彌前年幾つ。按十八歳でムい。ます。彌其の亭主ある。按有ません。彌私し亭主ある。と言。が。ら。前夜の疲れ。よ。て。眠り。先後も。知ら。せ。喜。娘の。好き。機會。と。傍へ。寄り。喜私し拾弗やる。今寐る。按摩の片手で。札を。擦つて。と。る。按是の。お。金。で。の。無。い。様。で。と。喜これ。お。金。お。前。眼。無。い。按成程。人。が。來。ると。い。け。ません。喜。娘の。有。無。を。も。言。を。抱。き。つ。く。按摩の。驚。き。益。々。疑。り。按。彼。れ。お。金。の。妾。を。欺。そう。と。謀。た。よ。相。違。い。憎。い。人。だ。と。力。を。極。めて。陰。囊。を。握。る。喜。痛。い。彼。れ。眞。實。金。放。せ。と。大。聲。を。揚。て。騒。ぐ。彌爾の。眼。を。痛。した。れ。と。知。ぬ。振。し。て。居。る。下。女。や。下。男。の。此。物。音。よ。驚。き。走。せ。來。り。按摩の。陰。囊。を。握。て。居。る。を。賭。て。亦。駭。き。女按摩さん。何。を。と。る。の。だ。へ。男按摩何。を。し。や。ア。の。る。の。だ。大。事。の。お。客。を。困。らせ。や。の。る。按摩の。泣。聲。を。出。し。按。聞。て。下。さい。まし。此。人。が。替。だ。と。思。ふ。て。拾。弗。やる。の。ら。寐。ろ。と。妾。を。欺。ま。し。た。是。の。お。金。で。の。わ。り。ま。せ。ん。餘。り。酷。い。か。ら。斯。ま。た。の。で。と。男是の。唯。の。紙。だ。丁。度。拾。枚。の。酷。い。毛。唐。人。だ。お。ア。と。皆。下。へ。



行く暫くして主人が来り、主、今の話を逐一聞取ました。彼も事がある外のお客の爲にも成らぬ第一店の障客も成まらぬ。何かお宿移を願ひませぬ。此人馬鹿私に保証する。主、迎も承知の出来ませぬ。按摩が立腹して未だ歸りませぬ。幾らでも宜しいお金を彼へ遣て歸して下さい。何の御出立を願ひます。彌、仕方ない。五弗程按摩を出して遣り勘定を済して茶代屋を出る。彌、お前ふり困る意地が横あい。斯事になるのだ。度しめ。喜、何も已の此一方の耐忍力の薄い。彌、是ら行先は何處と極る。喜、よらつかうよ。と、日比谷の原へ来り、見れば西洋造りの大樓あり。彌、彌の通行の人を喚び止め。彌、一寸これ區役所です。是は國會議事堂で、いませ。と行き過る。彌、成る程彼の國會議事堂もそうだ。喜、續々出て来るの、議員だ。ろ、腰の屈た人の多い。蹴蹴いて轉んだ。浮雲さい。翁さん。明日の一日傍聴しようか。彌、よ。と。喜、何故。彌、何故。つて已等が聞たつてつまらん。語が解せぬ。から。喜、只様子計りも。彌、よ。せよ。と話しあ。新し橋を渡り。堀端も添ふて右曲を

彌、是は何だ。ろ、確る何の偶像だ。ろ、彌、日本の偶像國へ。喜、種々あ事がある中、あも狐杯を祭どの奇妙じやないか。彌、其うへ。駭いた。少々未だ。彌、風臭い。喜、然し我々の品行を願。彌、何故。其う内幕を願。喜、ア、ア、と笑ひあ。びら俳徊する。喜、最う足の勞れた。夕方お近。ろ、ろ、彌、旅へ宿。ろ、彌、賛成だ。然し。彌、旅がある。一晩だ。ろ、高。か。いの。よし。彌、是。と。傍の商店へ。這入り。喜、近。安宿屋ある。番、五六軒先。ム。い。喜、あり。ら。う。と。立出て。安宿屋へ泊る。主人と思し。き者。入。来。り。主、西洋料理を。上。ま。ま。よ。う。の。喜、日本私し。好き。と。聞。達。へ。て。答。ひ。たり。主、屋。板。代。が。三。拾。錢。米。代。が。五。拾。錢。と。一。薪。代。が。拾。五。錢。と。一。夜。具。代。が。一。圓。八。拾。錢。で。一。其。他。の。味。噌。の。代。が。拾。錢。で。一。志。る。此。の。三。拾。錢。と。ぬ。め。つ。が。二。圓。で。都。合。五。圓。拾。五。錢。に。相。成。ま。と。只。今。お。拂。ひ。下。さい。ま。し。有。難。う。存。じ。ま。す。確。と。五。圓。拾。五。錢。頂。戴。いた。し。ま。し。ま。是。の。明。朝。ま。で。の。で。其。餘。の。又。頂。戴。致。し。ま。と。下。へ。行。く。彌、實。に。不。潔。な。座。敷。だ。健康。を。害。す。傳。染。病。流。行。の。時。杯。の。匂。香。を。處。だ。傳。染。病。の。巢。窟。だ。喜、其。う。さ。外。の



藤原へ引移るうの今掛も金を取戻して彌何だ鼠の顔を出しよぞ。愕も鼠  
 の小便だ困つゝ處へ來よ。喜巳の顔へ小便の降て來よぞ。駭いも早く引  
 移るうと障子を開る。此時巡禮の親子の隣座敷も居るを見て頻々涎を流し  
 眠尻を下て規ひ寄る親の今年四十前後娘の漸々十八九色の白く鼻筋通り  
 衣服の甚だ醜けれど先づ親顔十八並以上と見られぬ。喜巳の最う引移り  
 の止よまよ。此處も十年も廿年も居たく成る。彌困る氣が狂わんの水でも  
 掛よう。己の一分時も嫌も成た。變な臭氣のそるぞ。お前の餘程風流人だ  
 喜巳の何んを注告も何も受けん。斷然此處も泊る生命も散て惜まん。彌一  
 何云ふ。量見も成る。う不思議だ。手を拱きて考ひ居る。喜何も耳にの這入  
 ん。無益だ。黙れと鼻息を荒くして隙を窺ふ。如し彌爾の益々愕き默然とし  
 て居る。主御飯でムいませと膳部を持來る。面人の臉を潰し何して喰て能  
 やら。更お分ら。暫し考へて彌爾の漸々一盃を喰終り。味噌汁を飲む。彌是の  
 何だ。鼠の香ひだ。と吐く喜娥の一生懸命も氣を隣の彌爾も取られ。食事

もささで鬱き居る彌。嫌な物を喰て胸が悪い。最引移りの止よする。此  
 の喜何も己の嫌も成た。彌其で己も耐忍して此處へ泊るとまよ。喜其だ  
 胸が懸るけれ。早く寝る方が能い。彌最寝る。ら鼠此用心を志て呉れ。喜萬  
 々承知だ。寝ら眼を寐すとい。るん。彌何故。喜何故。でも能い。ら早く寝る  
 彌胸が懸く。成ると寝させぬ。こそ可笑けれ。

第六回

夜も更渡る丑満頃時分のよしと寝床を出て五圓札をバ手お握り隣室此障  
 子を竊に明け巡禮此親子の寝息を窺ひ近寄て聲をひそめ。喜愛婦好い娘私  
 しこれ遣ると言。と親子の少しも知ら。寝入ぬ。喜娥の得ぬ。りと寝床も遣  
 入り臭さを忍んで眼を寐すをバ俵よりし。巡禮の娘と思ひし。誤り。て  
 此は抑も如何。巡禮の女親あり。喜是の愕いぬ。失策をしぬ。道理で少し臭氣  
 のし。もと傍よ。寝ぬ。娘見。此床も入んとする。時女親の眼を寐し。大聲にて。親  
 泥棒が這入ぬ。誰の來て下さい。と叫ぶ。下よ。主人不審。と思ひ。主。彼此聲の巡



禮衆の聲も能く似て居るが彼處へ泥棒が這入る譯があれ何れも變だかアと  
 二階へ登り見れば一個此男が狼狽し逃途を失ひ困り果てて見へるりける  
 主人の怒り有合ふ天秤棒を以て滅多打を打つらぬれて男の大聲あげ喜私  
 し悪い是れ進上救せ主人の手を取り打點頭き主是計りての救さん最と出  
 せ喜幾ら勘辨主 fifty dollars (五拾弗) さら救きて遣る諸巡禮衆十五圓を  
 ら救まへ前と山分よして親幾らでも能いいます主成程其うのい前  
 實に驚いた人だ一体此處へ何しよ來ぬ喜少し主娘兒の處へ來ぬつたか  
 酷い奴だ早く fifty dollars を出せ若し出さんなら警察へ訴へる喜娥  
 の大に驚き五拾弗を出して謝と主人の拾圓程を巡禮に渡と主さて斯成て  
 見れば前前方兩人の今晚出立して呉れ一時も其を奴の置くこと成らん喜  
 今夜だけ主いゝん斷然いゝん此時彌爾の眼を痛したる体よあし彌私し何  
 も知らん是馬鹿氣狂ひ今夜たのび主氣狂あらば猶以て泊る事成ません亦  
 勘定の返却が出來んと二三の無頼漢の力を合せて遂々戶外へ突き出した

り喜娥と彌爾の途方お昏れ黒白も分ぬ眞の間彌爾の大に不快を感じ彌何  
 もお前の爲に兩度まで斯る始末も成て行末案じられてあらん喜已の怒  
 かつた實に己の耐忍力のあいな最う四時だぞ彌一体お前の何處へ行のだ  
 喜已お分らん何でも歩いて夜を明そのだ彌いた未だ己の腹の疼まの  
 快あらん痛いと大聲をあげる巡行の巡査の不審お思ひ巡お前方の何  
 時やと思ふの深更に及んで大聲を發する事の相成ん事を知ん一寸來  
 い喜娥の彼の安泊の件にて捕縛さるゝ事と思ひ泣聲を出し喜何の御免何  
 の御免彌お前の意地の穢い爲に何あ苦勞迷惑をそるの知れん喜已のら  
 實にまを御免と大聲をあげて泣く巡お前方の家宅のあるじやつらう喜私  
 くし其の日本を見物も參た者で巡一應署へ來いと拘留もある兩人の大聲  
 おて一晚泣き明と翌朝も成て以後を誠められ放免せらる彌酷い目み達た  
 お前の爲だ喜已の悪かつた救せ最東京の嫌も成た横濱へ行こう彌大賛成  
 だと六時此氣車に乗て横濱も若し旅宿を求めて二三日逗留する彌お前も



餘程懐事の深く成つた喜一體己の懐事の有る彌馬鹿を言ひ喜時あぢ等の金を消て計り居て儲た事がある一儲け遣る苦風のあかろうの彌お前の才子だ遣つけよう喜旨い旨いお前英國法律博士と言て日本人の代官をしろ必を外人お對する事件が多いから己のお前も隨從する者だと言たら大儲がある彌驚いもお前の根の馬鹿であいと言あがら手を打つ下女何の御用で彌一寸御主人お御面會したい喚で用あくべ下女長よりました主人只今御用の由承まわりまして來りましたお仰つけ下さい升喜三外で無此人英國法律博士主人近頃外人お對する事件多い日本人便利のため代官とする宜しく主人私しの知己ある澤山山い升中も出雲麻氣太と申そ者おムい升八十六萬圓だけの生糸賣込金請求の件で何分日本人任せてい不充分の處も有と申し居りました又美濃末太郎と申す者の豪商て定約違反贖罪金を強求する此て又本手梨八と言の外人より織物類買込金額二萬五千圓を昨年既お拂ひ込る節歸る途中誤つて請取証を汚損し

たるの爲其効を失ひ彼其實を傳聞して再求を申し入たる事件おど野ありませれば私し先方へ申報せませう喜先生の英國おて有名必を勝ま心配無い主人何分宜しく願ひ升お三や火をあげる坐敷を掃除しお湯をわけやと言つし下へ出てゆく彌旨くいつたあお前の實に才子だ驚いお己の一體全能だ何だお人の來た様だと談話を已る主人過刻の實お失禮其節御話し申し置ました是は出雲麻氣太と申し是は美濃末太郎と申し是本手梨八と申しませ何分宜しく當人共是非貴士様お代理を願ひたいと申し居ませ過刻美濃末太郎の贖罪金を受く可き其金高をお話申そのを忘れましたら彼は五萬圓おそうて全勝を得れば謝禮として各々半額若し儲ましたらば五十分の一を差上ませう如何で喜先生如何で彌私し日本人助ける爲め來た其で宜しう内金を受け約定証書を取結びませう主承知致しました出雲君始め異議のムるまいお三人承諾して約証は捺印する主人是にて事お極り升たお謝禮の内金を先生へ御遣わし下さい出今日初







客方をお喚もらうして来いと申しましたら何卒お歸り下さい彌私し用を  
 い喜主人を此方へ喚て来い長其の寢よ迷致ていいます一休まだお拂ひも  
 頂戴致しません喜お前知らんと言ふから原語おて頗る迅速又彌爾又話す  
 喜已等の今此處を逃れても船此出帆の今日午後八時おそうぶら逃げ伸  
 びられぬい寧そ歸つてのら一考ひををし其のら此事と志よう彌其さあき  
 まりの悪るい喜其さ事の關うもん彌好し歸ろう喜番頭直ぐ歸る船頭船  
 師せ貴客方計り乗つて船じやのせん其りや成ません番是へお乗さ  
 い船賃の頂戴若ようぞ申しませんと兩人を乗て歸宅する主只今お歸りお  
 二階へ火をわけお喜お前用ある先生故々歸る何お用主お二階へと二階  
 へ通し主長吉やお客此容子の何てあつぬ長主人を此方へ喚て来い此已  
 の用が無いれと言て實お骨の折ました何でも船に乗て何處へ行うとぞ  
 お違ひありません主其うのハ變だ眞物此博士のあと言つて起て二階へ行  
 き主ハお死下さいました主人でいいます彌此方來る宜しい主ハ今日お船

で沖合までお出かけお成り無ぞ御愉快でいいますたろうお何の邊までお  
 出お成りましたの彌彼れ其れ船が喜船が出い般とる一朋友一  
 るお送りお参りましたも貴公用ある何私し朋友あわお歸つた残念主ハ貴  
 お怖れ入りました實の過刻本手梨入の参りまして是非裁判上の事でお思考  
 を承まわり度と申まらる處々人を遣まましてお尋ね申しお歸てい  
 ます喜其れ至急主ハ大至急で唯今参りましても知れませんが喜それハ一  
 大ハ大層性急お人皆お先生ハ頼む聞くいらん彌爾ハ赤くあり  
 亦青くあり默然として居る主其旨本人又申しさるませう喜貴公才子そ  
 れ好しそれよし主ハと點頭き下へ行く喜嫉の妬のお話をやう喜大變だ段  
 々地金の出そうぶぞ今夜飛び出そうの彌不寐番がある無益だ却て酷い目  
 お逢ふ基た喜そうかお其あらお前虚病を遣つたら何だ彌其さお醫者の  
 病氣が無いと言たら何とる喜お前病氣があれもんか第一眼から出るの  
 ハ何だ第二ハ頭痛が爲るの何だ第三ハ下帯を穢その何だ其外澤



山病氣があるで無いの彌其う言れて一言もあいな喜其も違ひあいな醫者を招こうと手を鳴と下女「お手の此方でもか」先生が御病氣醫者用ある下女「へ畏まりました暫くして醫者の来る醫拙者の天保通寶と申し升喜私くし名喜娥伊久と申し升今度先生彌爾を指とよの日本へ渡來して内外人訴訟の事を代言致しまと英國の博士でムいませと通左様でムいませる意ふ有難いこととて然て御病人の貴客で喜先生でと通成ア…程何も御血色が悪いお手を…へお舌を…是のわんまり心配を爲つた爲お肺疾衝を起しました御滋養をなさい只今藥をさし上ますと歸り行く主人も傍に在て篤と醫者此診察するを見て居ぬれバ大お驚き主是の大變でムいませ其での御出廷の六ヶ敷ムいませうか彌ハア…フウ息がきれて物言ん歩行もむづかしい無益皆さん氣此毒宜しく喜何も私し氣此毒日伸を頼む宜しい主へ早く御全快を祈ります若し墓々しく御全快も成ませんと三人の者の難儀致します喜心配あいな大丈夫死ぬあいな主人の日夜苦勞此絶問あく如何

よ成り行くも此あらんと胸此晴間の無りけり彌爾も明け暮れ心配して今更ら後悔先お立たせ吐息をつへて喜娥も迎ひ彌已も今更何して能分らあいな前の一休後此事を能く考へせお遣つけるら實お困る逃げようか隙を窺ふて喜迎も逃る譯又いいのん番人の嚴重らしいと話しある處へ三人の豪商土産を持って見舞お來り美最う三月も成ませの御全快よ未だ餘程永らムいませか彌未だ…癒りそうあいな本今日如何でムいませるか彌今日今日…起て居れませ出…お話しあさるふの餘程御困難てせうか彌今日皆さん來て話し宜まいな永の間窮屈…此時喜娥の類に心配して寐よと報せど曉らざりき出さらバ少々お話を承まわり度らムいませの…英國此行政や憲法や貴族と小作人此關係や又の急進黨民權黨改進黨お現今此在様かど一寸お話しを願ひたいもれて彌私し…病氣…永い…話し…出來ん出短おくつまんで宜しうムいませ彌つまんで…面白味…が…あいな貴客何故震ふていらつまる彌是の…病氣で…出…貴客の博士ていらつ



志やるあら何よる必用を法律政治此書も澤山御所持でムいませうが彌  
 喜先生今度日本へ来る私し随従志た計り弟子澤山ある皆を國書冊少しも  
 かい只胸ある出貴客の佛獨伊魯等十餘國此語お通じあさるそうです  
 喜先生の大抵世此中の事の皆を御存じだの御病氣話せさい出貴客の佛  
 蘭西へお出も成る事あります喜先生の五六度参て處々で名を轟めし  
 した出私し其の商法家では是非有名此市府を知らなければ成ませんの恐勤此  
 外も昌んる市府の何々でムいませう彌其の彼れ何と申しまして  
 餘程ございます出少しの私しも名だけ知て居ます馬塞里昂拉安波耳多  
 杯でムいます馬塞里の何處でせうの彌矢張河ある山ある  
 犬ある人ある出其の知れぬ事でも言語あどの何處れを遣ひませう彌  
 一獨逸語と異違つる佛語です美お話し仲て怖れ入るの先生佛蘭西民法  
 の最初は何を箇條の有りませう彌其てとあ彼れ一とか前國の  
 彼の本を持ての來ぬ喜忘れしました彌困る原書があるだろ買て來い

喜買て來るの能いぬ美買あくるも胸も御座いませう是非只今承まはり  
 度う存じませ此時彌爾の答詞も苦しと黙然として吐息をつく喜娘も今  
 餘方つき俯いたる計りあり本時先生お話仲ばよの御座いませるが英國  
 倫敦府の大した疫病が流行して幾んど十萬人程死又翌年また大火の有て  
 府内の過半を焼き盡したと云ふ事を聞及びましたの彼れの「チャーレス」王此  
 時てその紀元後何年でムいませたるう彌貴公能く知て居る彼れの千七百  
 五十三年の冬も疫病が流行して翌年の夏大火ありました本偽をつくおも  
 程のある疫病が千六百六十五年の夏に冬に疫病此流行の先づ少さい其翌  
 年の冬も大火の有たれたお前様の其ても博士でせうの何おも御存じさい  
 てのさいか彌私し博士喜先生の博士と相違さい本何おも博士此辞令書  
 様此証固があるの彌其の今持て居らんが確かある証固がある美面  
 白いお前方お欺されて堪るもんか其証を見せる彌此處も居る其れ喜  
 娘より博士此號をもらつた本お前が博士よしたのか黙て居ての分らん早



く物を言んる有体よ白状志ろ喜實の何にの金儲けの有れば能い  
 と考ひ遂も考ひの博士お成て私し遣た博士何だと私し遣た博士だア馬  
 鹿を言ひ彼れの博士のお前が下肥取り丁度能い日本のお前が幾ら船  
 来しても其旨くいなんと本此野郎いげ増長志やぶる打つて遣れと天秤  
 棒を持ち出そ出雲麻毛太と美濃末太郎お主人も加わり是れ其しての店お  
 關の待て俟て本打殺して志まい酷い野郎だ彌私し悪い何の救せ裁  
 判所持ち出せ赦せ金皆拂う私し素と悪い裁判所嫌い金返  
 そ何ぞ赦せと兩人の大聲をあげて泣出そ主人の可笑さ遣る方かく主是  
 れ是れ本手様浮雲い止あさい初め私の遣入た事なら皆様お御損の  
 らぬ様計ひませうと巻紙及び十露盤を持来り主是ら勘定を始めま  
 御客人も私志の計う通りに金をお出しあさい左もさくバ公証致ませう  
 彌私し悪い仕方ない何でも損失策計り

第七回

主人の十露盤を前も置き巻紙を持ち主、出雲様の内金百五十弗と美濃  
 屋様の内金百弗と本手屋様の内金八拾弗と都合で金參百參拾  
 弗と相成まそる皆様も此事件に附て無益に四ヶ月も遊んだもんで  
 し亦種々入費も有たから御一人前一月三百圓此損害と見あし四ヶ月で頂  
 度千二百圓でせらお三人で探出金を合せて出雲屋さんの千三百五十  
 圓で美濃屋さんの千三百圓と本手屋さんの千二百八十圓で都て金  
 三千九百三十圓其外私し共にお拂ひの御座い升私しの損害の取て請求の  
 申ません彌駭いた駭いも喜娥氏何したら宜しめろろ日本へ来めら未  
 だ儲た事があいな何したら能めろろ金惜い徳役行く体惜い只今金  
 の無い仕方ない法律の處分を受よう已等其大金拂ふ力ない出二人の野郎  
 の餘程圖太い奴だ訴訟を起した處の金が無れば却て此方の損失だと話そ  
 小聲を喜娥の聞きとり私し仕方ない處分受る彌私し嫌い裁判いや出  
 前方の何方よ決せろる喜彌爾も私しも處置をうけませうと斷然答へれば  
 五十七



四人の憫れて茫然たり彌私し裁判嫌や懲役嫌や金少し出そ澤山ベケ主私  
くしの先よ勘定を爲る時異論を言て困ると申て置弁ものお忘れに成ま  
したる彌「知ません喜」裁判行く主「其じや斯致しまさやう半額にお負申し  
ませう如何ですか彌私し拂う失策計り外行くベケと言あひら千九百  
六十五圓を取出しとも惜氣ある面持よて彌「是進上赦せ喜」遣る及バ懲役  
覺悟彌「其事言ふ外お儲け口の澤山ある主」正は頂戴致しました御旅  
宿料の損害償金を入まして百三十五圓是の私しのお受取申す分て  
彌「金出る澤山乞食成るとこぼしあひら主人は渡せば主」最う是を頂戴致  
せば外は用いません早速お宿變を願ひます彌「是れ三度運悪い早く出  
ると兩人の面目無氣お出て行く喜實に驚いぬ斯失策計り積て困る彌  
失望するお儲け口の有るならう何しろ己の腹が空も何ある無いるお喜彼  
處は團子屋と言ふおある喰て見る彌「何でも能いと馳出し彌さん其一つ  
婆未焼ません彌焼あいな喰あいの婆」焼ません彌焼あくも宜しいと言より

早く一申取て口よ入れる彌「熱い熱い熱い喜娘の遙よ之を味て  
馳來り喜何まゝ何またのだ彌火を喰た熱い喜意地の穢あ  
から其だ彌醫者を聘で呉れ喜馬鹿めお前の方で醫者へ行け彌「ハハ行ふ  
うと四五間行く婆」お錢の未だ頂戴ませぬお錢をと呼ど叫と彌爾の口  
中の疼さお爾兼ね聞おぬ振りして行く婆泥棒喰ひ逃げ巡お前何故  
代價を拂んぬ彌「此處此處巡」署へつれ行くぞ彌「是あけまると十錢銀貨  
を放り出し一目散お逃げ出とホツと息を吐き彌喜娘喜娘早く來い  
と俟て居る喜お前も餘程馬鹿だ早く醫者に診れと是より醫者此藥をも  
らい彌お前己は續て急いで來いと言あひら一散お馳け出し五六丁程行  
て立止まり彌藥代を拂いよ來た旨あろう喜大出来だ萬事其の様よ遣  
れ時よ是のら巢を變よう彌函館何だ喜賛成だ早十二時だ出般するおら  
早く乗れど小舟を急がしおと白波と成ふけり



喜娥彌爾の兩人の小舟を急がし漁船大古丸に打乗り獲の漁も着す彌爾の窮屈でいゝん上陸まよう喜其の困る大古丸に耐忍して函館へ行おうと此時漁船の再び進航を初め一寸八の戸宮古へ寄り函館へ着し三日目の正午頃あゝき彌爾思たよりの繁華だ喜何ても北方の人の温知あそうだ一儲け遣るお實も勝地だ角上てムい丸一でムい仲星でムい皆虎でムい彌何だろ喜彌旅だろ彌是れ一番能い彌旅何番私し共第一等御泊んあさい喜娥の宜しいと一足飛ぶ小舟に乗移る彌爾も借よと飛び越んとする時誤つて波間入る彌彌私し死ぬ助け助け喜其繩を投て呉れ番畏りましと繩を投せれば彌爾の漸々取らぬり彌爾体勞れ澤山小舟乗れぬい番仕方ぬい此儘引き人間と致しませう喜早い宜しい船頭の一生懸命急ぎてゐるその漕ぎ着ぬ喜お前番は水漲り成る何だ少しの能いの餘程水を飲んだから吐きたいもんだ喜吐け遠慮ぬい彌彌一少し快い方だ喜番頭さん行こう番此處の家でムい喜是て第一等の

彌旅の番左様喜憐いた函館ベケ仕方ぬい病人ある大事取扱ふ下女三階さ早く上つてけさい喜分るぬい番二階へお上り下さい喜分たど二階へ上る四五日程過て彌爾の病氣も稍々全快しければ喜彌爾公此家の小便臭くつてあらん外へ移ろう彌彌已の死ぬ迄居やう喜馬鹿を云へ何故だ彌爾の下婢の氣お入た喜己等の何故下婢計りの氣お入るだらう彌彌亦彼方でも少し来て居るせ喜其うさ貴婦人の更に振向もしさい彌彌日本は貴婦人の色氣が無だろう一体何う云ふ譯だ喜國も居てさい無益だ矢張英國の貴婦人も色氣が無いのだ馬鹿話しも此位にして引移ろうと都ての仕拂をあし仲濱町てふ處も名高き志田輕屋も宿を求めり喜此家御亭主ある下女大人亭主を云ふ去年の秋疝氣で死てをまいますた喜かえさん居る下女お神さん居るのい未だ大人を持さいもんだら皆あが大人を持さい持さいと云ふのい喜亭主外さい下女無ちよいけ好さい兄さまだ喜神さん呼ぶ一寸下女故くと呼ぶと聞さいのい怒るまげやよと言つて階



子を下りて行く姑くして此家の女主人おさせの白粉ふてこて石菊をかしく  
 白髪染をバ塗附て墨もて禿を漸々護度化去徐りそろりと入来りさせ  
 大層お賑あだんを有るおけやあ来て呉ッてマ、喜用外でおい此人  
 英國の醫學大博士望む人あらバ診て遣るさせ「其でそか私その類虎船の  
 お方だと思たまけや又失禮をたまけや又堪忍をてけさい病人の澤山ある  
 しい...彌私し病人をを澤山東京ある横濱ある是より女主人の諸方へ傳  
 通そ女も晩も成そた彌爾士太亞智と云ふお醫者さんのお泊でとるさせ  
 居るわい女診て戴きぬいんでその男御免さしい己ア陰囊を釣てあらね  
 志きや又診てもらいぬいんで女御免こけさい此愛子の寐小便たれだま  
 きや又診て戴きたいんでさせ皆様此方へ應と皆々二階へ上る彌皆此方  
 来る宜しい喜先生...彌何だ喜先生、彌貴女何處居る名何と女己ア家の  
 大森濱で毎日々々購買おねえと桶を背負て行まけや又東風お吹  
 度腰が痛んで始めの大人(専主を云ふ)の爲だと思て床を別よとも今以て

廻らねえで困てるわいな名ハ杉田おまん處ハ大森濱三百三十三番地彌何れ  
 成程と呷を見舌の色を診て腰の邊を擦る女先生其處の腰でさしい其處  
 と賭るのハ大人計りだ彌此處見さい病氣分るさいまん、快い心持も早く  
 療治をて下りの喜娥の側お在て彌爾の方劑書を賭て澁茶お油を混て液  
 す彌次来る男己ア生れの南部の笠石在て平五太郎と云て村中此立物で  
 有たお稻荷の時分村の權太兵衛どん此獨り娘のおたれ女郎と何そて村中  
 の若い者又悪まれ此松前さ飛込んだちう譯だの二三年過ておたれの團子  
 を喰て死んでとまい跡ハ己ア獨りて此病氣だお醫者様ア何お能い療治を  
 て呉れやと泣出す彌是直ぐ塗る喜娥の方劑書を讀下し鹽油を二十滴程水  
 お加ひ又擦藥ハ飯粒お炭灰を入れ少しく種油を加へて遣る次の一個の中  
 年増色白く鼻隆く眼涼し彌エマツト此方ハ御病氣！女少とお腹が痛んで  
 あらねえまけや又診て下りの彌、何れ女、此見だしい彌其う成程！怖  
 がつて泣く！モウ宜しい喜娥ハ白砂糖も少し鹽を加へたる粉藥様の物を



奥へ入り此等の病入の不思議は皆全快せければ彌爾の名の愈々至道も高く成り日々來り診を乞ふ者百人も降らせ彌爾は「盲くやつまゝ喜其だ毎日四十圓の乾度収入がある此分でいけば直に國へ歸つゝ方だ能い彼の悶着の最う立消ふ相違ない彌爾其は違ひない大体尻の割ん中も止らる喜取れるだけ取らる人氣の東京横濱より鋭くさい下男「患者の十人程俟て居りませよ通じませうの彌爾宜志い皆續々と入り來る喜第一番此患者診ませ彌成る程貴公餘り酷い働き邪寒引も其れ元男私その書生で酷い働きの致すも事がある彌變た「偽そ喜娥水も梅乾の取を加へて遣る彌次ぎ來る女「彌貴女も疼い嫁入する早い夜の事あまり多い子宮破れた女私その今年十一歳で未だ嫁入とさいはい偽吐か人ださ彌偽さい一体日本嫁入「早い喜娥の餘り忙しきお湯れ水計りを遣る彌次ぎ來る男「彌何處痛い男胸が疼んで晝夜眠られましね彌お前さん一体運動たりない男是は何んだか妙だ皆様聞て下ない此私への運動が不足てさ今こそ病身だの五六日前まで強

い働きを船でとて居たのお運動がたりんちうの醫者である兄様だち何だんそ皆々動と笑ふ彌お前さん何云ふ喜先生の大博士だ真違ひない男皆様の一体真違だア異人さん何でもあんでも利口だと思つてゐるまげや欺されるんだア喜其れ違う先生英國の醫學大博士僅の金診さい日本人金さい可憫そう安くまけて療治すると言ふから麥酒も少々鹽を混ぜ水を加へて遣る男有難う飲んで見ませ彌次來る男私ア國の津輕でさいと先生様の名高いもんだら昨夜の船で來たのでさいとアね通常診られて男まひやさいへんじエ彌成程大層悪るいたいの醫者ゝる三日うち死ぬ男「是りやまア生命拾ひをさせませさいと有難うさいと彌お前さん此家空氣通り悪るい病氣索起る男愕い私ア家の津輕の藤崎在てするも一軒家て空氣の南西北東空の方らも吹て來いと無益だ先生喜先生の名高い醫者お前知らん男變な事を言ふからだと攻られて喜娥の物をも手あつかせ此處の手術の露れ時と一生懸命お思ふものゝら水を加ふるを忘れて只一



塊の塩を入れたる耳として喜ぶ能く三日癒る男、有難うといふ。彌次  
 さま来る男、已つちア東京の生れて、此時彌爾喜娥の驚愕する八つの年、  
 親み別れ餓鬼の時から手癖の悪く親類縁者も見放され處々方々と徘徊、  
 賭博の犯て罰を受し、頂度十二の秋の暮其のら其と悪事を働き酒と女  
 身を持ちくづし資本いらせの荒商法赤い衣物のお仕若も何十度と數も知  
 れチイ其頃東京の芳原で名の高一藝者の小花何いふ縁の知らぬ共互互厚  
 く鳴門海深工を彼ア知らせよ血水を揚て此大惚込三百圓と云ふ大金を  
 首尾能くせしめて高飛するの悪のつたむ上方筋へと志し大坂府下お家宅  
 を求め好た女を唄ふ持ち堅氣此商賣志て見たが根が曲てる根情のら賭博  
 や女郎も費ひさくし女房小兒をおきざりよ此北海道へ来て見たがいつま  
 で草の枯る時あり思ひ直して堅氣も成り職務を勉強して居ヤ、その悪事  
 の報の忽ちお人も嫌がる此病氣先生此名高とを聞て来ヤ、また何の  
 て癒して呉んおせいお彌、愕くこと澤山ありまを悪報ひ必せある心直す

しい男眞實お先生のあつまる通りだ今、最以前の服薬を後悔して正業  
 よ就て居ヤ、すび何分此病氣で困りヤを何の早く癒る様お祈ひ申し  
 ヤと彌成程是の第三期と申し私し同じ男先生も矢張り已と同病でげとる  
 何故御自分で治療をおしおさらぬのだ、彌最う癒らぬい平生薬をのこ  
 害防ぐ計り男先生何の其成らぬい様お願ひヤと彌大丈夫と云つし烟草を  
 水も浸出たたる液を陽物の頭へ擦り附る男、痛いヤ餘程痛いや、服薬是  
 と砂糖を搥お混じたるものを水も和して渡と彌貴公近頃運動たりぬい少  
 々運動する宜志男先生お前様の妙事をおつ志やいまそヤ養生をつかま  
 へちや運動が過ぎたの船乗をつかまへちや運動が少ぬいのと又此の已よ  
 運動がたりぬいのと一体何れ邊で其お鈍珍漢お事お言まそエ已つちや郵  
 便の配達だ是で運動がたりぬいなら両脚が擦てあくからア馬鹿お醫者も  
 あるもんだエユウお前のお醫者だと言の已ら此眼のら見ると醫者もア見受  
 られぬい此時いそがわしく入り来る患者あり女先生さん此薬の少ツとも



味がどねいまげやあ向此堤毛金庵さん聞たら水計りだと言たのい餘り  
 馬鹿よとあいて下りの男先生あんまり酷い是で病氣が癒るはずがある  
 べ裏の貿易負拙さん聞たら只の搥だと言が搥で病氣を癒すから醫者の  
 いらねい高い代を取るとの盗賊も違ひねい吾輩が貰つた薬の梅乾の香  
 のするら化学士某此鑿定を受たら梅乾の水を加へた物だと言た如何  
 る効能が梅乾お合蓄と居るの何お作用も侍て病氣的を癒その説明をま  
 且つ吾輩が過度の運動をせるとの如何ある變化を目して言れしる彌  
 矢張り！男時に先生さま先程貰つた薬の麥酒も搥を混だもんだと三軒  
 目の大船運齊先生が申とが其ん寺物で大金を取るとの泥棒だ裁判も持出  
 とべいかと二十餘人の病人が皆一同お聲をあげて此大談判中にも聞  
 勇と肌東京神田の大兄が男そら見る此已様を運動がたりねいと云た一言  
 の偽らしいら私しの郵便配達だと言ても聞ぬ醫者め此後何んも事  
 するか知りやまねい大勢のつて函館を退出と方後のためだるうら

今迄費つた薬代と費時代を取て遣らう男是れ兄さまお前金計り取る氣の  
 已ア此兩人の異人を打りたい男其りや打らうの殺そうのお互の勝手だ  
 其じや餘り酷いら皆已に任せませい男女其のよるんべ殺とと矢張已  
 も殺されべい男お兩人のお方へ貴人方の眞實お醫者様でげそのあお醫  
 者からお醫者の様お藥劑書此一冊や藥や何るの無りやあらねい其お物の  
 何處も有まそい初めの評判が大層だから診て見りや此始末お前さん方  
 何成るおつもりだ喜娥の彌爾と顔見合せ喜亦仕損つた何まよう彌今更  
 仕方おさい夜逃とまよう喜其う旨くいくまい一相談して見よう大勢  
 お對ひ喜薬の今迄日本おありふれたのと違ひ先生發明の藥嫌から代價の  
 返そ事あらん男何だア返そ事あらん成せば裁判を仰ぐとまよう皆様最  
 一同引きあげようと二十餘人の大勢が罵言嘲弄して歸らんと彌爾の泣  
 出し喜娥の青くあり如何のせんと戦栗するを大勢の見て大お笑ひ顔状  
 見る智慧もさいのよ山師を遣らんと企てた處の無益だ無益だど大勢よて



驚かすしければ此家の女主人の病も陰めて閉居たり

第九回

斯る處へ三人の男女涙をさらし入來り女只今親父の死よまそた届をそ升  
あし彦印を願ひまそ男たつた今頃の死よまそ届をそるまけ彦印を女  
昨夜亭主のさくありまそ何の彦印をとつめ來るを最前の勇と男が聞く  
より早く大お怒り男愈々以て手前ちや唯の置けねいそら見ろ病人の皆さ  
死んちまわア詠へるのら其思へど怒るを彌爾のまバしと押止め彌爾し恐  
るい勘忍男あんだ過刻己よ説法をまやアつて自分から罪惡を犯まやの  
る悪い奴だ喜皆私し恐るい彌金三千圓皆へ遣る勘忍たのむ男其うさそら  
出りや怒の世界だ話しつづつるうが皆様何うだ男女私ア計りてねいまけい  
又外よ澤山あるから其人達へも割てやるべいか一人前十圓計りか能かべ  
い勘辨をべい男皆様が承知したるら其て話しをつけよう彌爾の左も惜氣  
どうふ三千圓を渡そ男の受取り大勢よ割附け不參の者への名簿の日記を

彌へ新聞よ廣告して渡し死者の遺族への二十圓づゝを渡そ事お決し各々  
其處をバ散じたり跡彌爾の涙を拭ひ彌都ての事斯いけあい外儲け口あ  
るか喜何うも失策計りだ何なる函館での信用を失つたるら無益だ今度の  
新潟へ行こう彌其のそれも好らうが己の此土地よ永く住たい喜何に日  
的の有るか彌無いけれど喜亦彼のお糞お糞もの彌其てあい喜小兒の  
言様お事を云まよ行くどまようど自ら先だち荷物をくしり出立の仕度を  
あし喜行こう彌仕方おあ行こう何の面白事で一儲けおしぬい喜其だ  
のら早く處を變よう彌彌爾の喜娥お手を引れ座敷を出て櫛子段を下んど  
そる時此家の女主人の一室より顯れ出て女此海情男め最前ら彼の一室  
で聞て居れば英國の大博士だと言て置あがら何だ郵便配達の彼れ男よ這  
つけられグリの音も出せ三千圓と言大金を取られ如何に前宿賃を拂て後  
たどて此身を女房よそると約束そたののアリヤ偽るんす欺て此家を出て  
行くどの悪くすい男だ女房お持てお呉んあいの是非女房お成らまよ置



あいはい其とも手切金でも出そうと言ふら勘辨もする左もあくは女房  
 にすて下はいと人相變ての談判又彌爾の黙然行を居る喜「お前の何時の間  
 お其奇事を志たのだ已に蔽して一人てせしめぬ罰だ何とかまろい彌爾  
 已に悪るのつたよあさせぬ金何程ほしいさせ驚くよ去月二十四日の夜妻  
 の寐床へ遣て来て月々五十圓やるのら是非妻みあれと言ふから金も惚て妻  
 已成たの其後女房よすようとの相談金がある故悪くし思わぬ運其ありよ  
 成ますた今更棄て行くとの願慾だど力も任せて彌爾の朋倉を推す彌爾の  
 真倒さまは楳子の段より落て腰をぬく彌「痛い…痛い…腰抜た…痛い…醫  
 者…を…聘て…呉れさせ…自分醫學大博士でお醫者を聘どの何う言譯  
 だねい可笑くつて耐らあいい早く手切を渡すて出て行てお呉んあいい  
 喜少しまてと言つしあさせよ對ひ喜金幾ら入用私し話志てやるさせ「そ  
 うね少あくも五百圓であければ承知が出来あいい喜「そうか今話しそ  
 俟つ宜しいお前何處の痛いのだ彌「腰の痛いと言ふがら小聲よて彌「實り少

し痛いのだが何んど彼女を言く放そ考ひの無るろう喜「六の敷るろ  
 何せ金貨の百圓も見せ無は慾の有るら應と言んだらう彌「其うの今已に  
 其うするら見て俟て呉れ喜よし拙をやるあよ彌「痛い…痛い…喜「困つた  
 ああさせさん一寸力を貸て二階へわけて呉れさせ「其奇癖ッのきり嫌だま  
 けや喜「仕方ない…と漸く彌爾を引きあげたり彌「あさせぬ私し悪るい  
 是れ進上勘辨たのひと光まほき金貨を百圓そろへて前へ置けいあさせ  
 の心お打點頭きさせ「其う話の極れは其て能い志けや早く出て行てお呉ん  
 さいい彌「其から左様から喜「誠にお世話成りましたさせ「昨日來あいいと  
 別れ行く喜「未だ船が早い今夜は十二時出般あそうだのら盛町や蓬萊町を  
 索見と出掛よう彌「賛成だ先づ盛町のらと志ようと兩人の盛町の遊廓へ行  
 く喜「此樓の山三星と云ふせ彼れ山一と云ふせ彌「能くお前知てるあ  
 わつた事がある喜「あつたとも頂度二軒へ九十九夜通ふた今夜で百  
 度だのらあつた何うだ彌「少しやけあ成てるが大金を損したのら止



う此頃の失策計り多いら度まもう喜其うの何だお前の股が大増ふくれ  
 て居るじやあいか彌六實の耐忍をしたもんだから喜成程助倍の其ももの  
 か何も別品の少さい様だ達茶町へ行こう彌行こうと兩人の急ぎ天神町  
 を過ぎ支應の前を下り會處町を通り南部坂を下り恵比主町を索見し達茶  
 町に入ると爲る時後ろより無頼漢ようの大男の尾して來る喜彼の梅川だ  
 せ彼の金子屋だ彼の金仙と言料理屋で彌其か大増美の家だあ後ろより來  
 りし大男が近寄て男 Only one dollar per a man (お一人金一圓てと彌私し  
 嫌い喜私し彼の動物の用わりません此時最前の無頼漢の雲を霞と逃げ  
 うせたり兩人の少しも氣が附るを浮れてこそ素見しける喜己の時計の  
 少し狂ふたお前の何時だ彌其うさあと捜せど時計の影だよ見へを遺失  
 すると言ふともあらねば能くまらぶるよ只金鎖の値をを餘そのと彌今の  
 男の盜賊お相違あいか彼の時計の親父が秘藏の物で有つた代價よしたら二  
 百那餘りのだ實お不運な積き通した何志よう喜驚いた警察へ感ひ出よう

る彌其さあ驚いたまだ盜れた物があるぞ懐中へ入て置いた金貨五弗の紛失  
 また喜固つたお今の大男が盜賊お違ひあいか早十時頃だろ船が遅れるぞ  
 彌何志よう何だお前の時計を二箇持てるあ喜何れを忘れたお前の指子  
 段ら落た時彌干へ引掛たのを己が拾て置たのだ彌其あ早早く出せば能  
 いよ金貨も早く出せ喜金貨の己の知らん彌知んと言事がある時計も持て  
 居るおら喜眞實お知らん彌知ん事があると言事がある頭を二ツ三ツあぐる  
 異人の喧嘩だど四方より集る人此山をあと彌時計がある喜見ろ己の  
 頭を殴つたおらだッ見ろ彌仕方がある斷念で船に乗ろう喜己の殴れ損だ  
 彌其も仕方がある喜馬鹿を云と兩人の喧嘩の跡方も白波越て越路ある  
 新潟として流船お打乗り函館港を解纜せし明治廿六年の五月あり

第拾回

此處の名は達五港の一新潟港の夕景色往來まげき大川端を彌爾と喜娥  
 の兩人連れ彌實お愉快だ喜日本は何うも山海の景色に富んでるお斯う



いふ國の欲いもんだ 彌馬鹿を言へ 喜最う八時過ぎだ泊らうの 彌最う金も  
 乏しいら儉約をまかいと成らんら安宿屋に泊らう 喜安宿屋の閉口だ  
 東京の二比舞をやるといふん 彌お前の女お手を出さへ何も心配ない 喜  
 宜しいと兩人の宿屋に泊る 下女能うお出成たのんし、座敷へおいてお  
 さい奥の一室へ入る 彌何だ變な香がするぞ 喜愕いた猫は糞をふとつけた  
 彌きたさいお喜娥の鼻をつまみとあがり手洗鉢よて足を洗ふ 下女私共の  
 宿料を前より頂戴するのが例でムい升らお拂ひを 彌幾ら遣る宜まい 下女  
 「三圓戴いて置ませう 彌是れ三圓お前年幾つ 下女「十七歳でムい升 彌其  
 る已の連れ男助倍用心する宜まい 下女「嫌な方だれんしと歸り行く  
 喜娥の足を洗ひ一室お來り 喜今已の事を助倍と云て居るお 彌聞へる勘  
 恐しる 喜赦してやるう 彌何よる金儲けがあるらう 喜お前の金々と官の  
 少も儲けた事な無でないさいる 彌何らして儲けたいもんだ 喜其の已の困  
 館へ居た時間たふの新編の女郎の産場所だと言たところで女郎を仲買する

商賣を初めたら儲かるだらう 彌然し途中でお前が手をつけるかも知れん  
 喜商賣と成りや其でもかいヤ却てお前の不安心だ 彌其だ何の外お考ひよ  
 喜其うのち其も能かるう 彌然し女を安く買て長崎の神戸へ行て賣ら儲  
 けがあるだらう 喜賛成だ其上此地の織物の澤山あるから買えめよう 彌上  
 策だ先づ亭主を聘で話しを附ようと手を拍つ 下女「何の御用で 彌一寸用  
 ある亭主 下女「畏まりました姉として亭主入來り 主「誠お無人でムいまし  
 てお粗末計り致し居ます 彌時お此地の物産織物女郎を他國へ賣捌きたい  
 問旋たのむ 主「織物の絹類で女の上玉でムいまそか 喜織物上等女上等欲  
 い 主「畏まりました四五軒知合もございまそ直ぐと取寄まそると下女よ  
 其趣きを命じたり亭主の居室お煙草を輪お吹き一儲お有ついたといふ面  
 持よて居る 番「御免下さい信濃屋でムいまそ只今の有難う 番「御免下さい敦賀屋で  
 番「御免下さい信濃屋でムいまそ只今の有難う 番「御免下さい大川  
 ムい賊も今日のお天気で毎度御用...有難う存じ升 番「御免下さい大川



の大和屋英太様此方である主左様でいます番越後屋から参りました主此方へお出下さい只今お客様へ申し上ませうと奥の座敷へ行き主御免下さい過刻お話し織物を持参致しました此方へ通しませうか彌宜志い通を主へ畏まりましたと居間へ歸り主何んと物の相談だの奥へ居る兩人の異人様の餘り智恵のなさそうか人達だのら皆様で一儲けを遣りたもんたの私しと心を合せて下さらんか大儲の事あら利を非よ曲ても遣りませう信先馬鹿から造作もあいな事だ敦五圓の代物を拾五圓賣うる儘だ何ても斯いふ時おけりや商人の仕方ありません越異人あら金を澤山持つてるお相違ないや好い時出逢たか主そんな其うと決斷まりや早く代物を持て参りませうと都合五人の腹を合せ一室へこそこの座を占めたり主只今お話し致しまま織物を持参致しました一体此土地の風習で商物を見たらバ買ぞと踊ると言ふ事成ません彌其聲いた幾ら價値が高くも買あければ成んか主左様で然しお價値此處の至當でい

まそから三歩心配より及びません私しは萬々承知して居まを決して掛の掛ません彌安心し宜しく頼む喜上等の品澤山ある宜しい主代物の大丈夫でいませ私し共て春夏秋冬織物を此四軒で求めまら少しも品の悪く御座いません何でも一軒への拂ひの毎月五六百圓も在まを此時四人の番頭の頭を低て笑ひ居る彌安心した宜しく頼む早く代物出と宜しい主大坂屋さん貴公の代物を先お御覽入ささい何てもお安く品の上等を願ひませ大品の極上等でいませ是れ越後縮で御覽一疋で廿五圓で外から十ヤ廿と八圓でそのお安く三圓引て置ませう主成る程先づ是れ越後縮で最上でせうか何も安い彌安い品宜しい澤山安いの成る程上等だお店あり好い品の御座いませか大有難う存じませとこれの一疋廿三圓で一文も負られません主安いもんだ去月私しの喚も買て違たのの一疋で三拾圓でいませました安く成ましたね彌其二十疋買ふ大



有難う存じませ 彌其處もある織物何ふ大い 是の甲斐絹と申しませ 彌幾ら  
 大いお安く致しても一反の十三圓よりの引ません 主成アる程光があるし  
 地の好し安いもんだ 彌安い廿反買う都合幾ら大い有難う存じませ 都合二  
 千二百廿圓でムいませ 彌是渡すと銀貨めて携ふ主人の心筋るよ悦び 主信  
 濃屋さん御用を信い有難う存じます 彌お前織物上等ある 信い澤山御座い  
 ます 喜此處へ出せ 信い 是の山繭紬で 彌一反幾ら 信いお安い處一疋三十五  
 圓で 彌澤山高い 主是れ是れお前真違ひだるう 信い 眞違ひ...て...ムいま  
 す 實の拾九圓で... 主これの眞實又安い 彌其れ十疋買う 信い有難う存じま  
 す 主お前途方もあい價を云ふと皆様又迄障害に成りますぞ 彌其れ何ふ 信  
 い 是の黒八で御座いませ 洋服地杯も宜うムいませ 彌一疋幾ら 信い 廿三  
 圓で...ムいませ 彌其れ五疋 信い 有難う存じます 彌其れあふ 信い 是の博多  
 織と申しませ 服の至極流行でムいませ 主成アる程是れの洋服が大法  
 行で、博多の無いものと東京のら申し越れるので、品切又成りませう 彌價

幾らあります 信い一反お安く致しまして廿圓でムいませ 主、好い品だ成  
 程洋服もまたら美麗かるうあ安いもんだ以前あら一反三十圓位で有る 彌  
 安い五反買う 信い有難う存じませ 彌勘定幾ら 信い都合三百と五圓お成ま  
 と 主、其の眞違ひだるう 信成アる程四百零と五圓でムいませ 彌眞違ひあ  
 い 信い彌是れやると銀貨めて渡す主人の益々悦び 主貴紳のまだお品をお  
 買上下さいませ 彌價安い澤山買う 主い品のお好くお價直が安いのも御  
 爲よ成ます 敦賀屋さん代物を 敦い 是の絹縮で變たものゝ種々ございます  
 主成程好い品でとあ價値の高るう 彌是れ幾ら 敦い一反の廿五圓でムい  
 ませ 主是の安い私しは昨年買て遣たのゝ三拾圓でした 大層美麗でと  
 さいました 彌拜見あります 主只今い少し金の入用が有まして 質よ  
 入でムいませ 彌其う私し大好き其品十反買う 敦い有難う存じませ 彌其外  
 何品ある 敦い 是の越後結城でムいませ 彌一反幾ら 敦い十八圓でお品の極  
 の上等でムいませ 主是の越後結城でとあ頂度絲織の上等又見へませ 安い





در روز یکشنبه  
در روز یکشنبه  
در روز یکشنبه



در روز یکشنبه



「奇麗だ彌」其れ買ふ十反教「有難う存じます彌」外品出す宜しい教「是の  
 緋織でムいませぬ教」是れ綿少しある教「其の品でムいませぬ主」好い品  
 だ一体お店より能い品の澤山御座いますと彌「價值幾ら教」一反十五圓で  
 主安いもんだ金がありや買て置たいもんだあ彌「澤山産い其十反教」有  
 難う存じます彌「薄て幾ら教」「……都合で五百八十圓お成ませ……」  
 彌「お前さん一番羨い金遣ると銀貨にて渡す主人の莞爾と笑ひ打点頭き主  
 「越後屋さん何よの奇ら志い上等のお品を御覽よ入て下さい」越「毎度有難  
 うムいます」是の賣八丈と申しまして東京横濱長崎神戸函館等其の他外  
 々の大流行で毎年神戸や長崎へ出しますその三萬三千三百三十三反もム  
 います此地の少しも流行致しません主「成程好い品でとあ人氣も逢ふも無  
 理でない彌」大層宜志い幾ら越「一反廿五圓で一体の三拾圓で外店へ上て  
 居ました彌」其れ八反計り越「有難う存じます彌」次ぎ山を宜志い越「是の  
 上田と申しまして長崎神戸へ大層向きまして最う品切れの店も澤山ござ

いまも相場之餘程騰貴て居りますと主「上田から必も人氣も適ひますと價值も  
 拘わらぬ上等のお方のお求めも成るゝら彌」價幾ら越「一反廿七圓よりの  
 一文も引けませぬ彌」其れ十反買う越「有難う存じます彌」外品出と宜志い  
 越「是の……米澤……と申しまして極上等の品で……」主「其の賣らん方よる  
 ろう越」何う致して是の長崎神戸へ能く向きませぬ彌「代價幾ら越」一反で廿  
 三圓……でムいませぬ彌「驚いた是れ木綿織高い越」絹でムいます喜「是れ木綿  
 違ひあい貴公偽言ふ欺す悪るい彌」偽相違あい「決して偽でムいませぬ絹  
 よ違ひありませぬ主」其の外へ賣たらよるろう越「……彌」お前私し欺す悪る  
 い喜「人を欺す盜賊同じと言ふが足ら足ら番頭の頭を蹴る越」偽でムいま  
 せん彌「亦偽い少し火へ入て見ると言つゝ燃えて香をかぐ彌」木綿香ひ日  
 本人偽澤山ありませぬ足をあげて番頭を蹴る番「仕方ありません外の品を  
 お買ひ下さい彌」買んお前さん人欺す悪るいと拳骨よて頭を三ツ四ツ殴る  
 主「何うのお教し下さい全く真違てムいましたらう彌」お前さん謝罪る教を



主「何うも有難う存じまそ至く貴紳方を欺そと云ふ譯てハ無く眞違ひら  
起つた事て...何成りど...品を御下さい眞違ひのあい様申し附ま  
したあら彌變つた品出す宜しい越ハ畏まりました是が本米澤で...彌其れ  
木綿お前馬鹿亦欺そ主「是も眞違ひで...誠お濟ませんお前さん...氣を附あ  
さい何うのお腹立の無いよう...おあらどん何故其處又立て居るのだ  
お茶をわけあお菓子を持って火のあいよ...氣のきめん女て...彌外品  
見せる越是の本米澤でふいませ彌是れ絹お前眼の分らさい越ハ眼の有  
ません矢張り貴紳の眼又似まして彌馬鹿を云へ價幾ら越ハ是ハ一反廿四  
圓て...主「何うも安い品の上等だ斯ういふ品の百圓以上のお方様又向く...  
金が有たら欲いもんだ...彌其れ十反越ハ有難う存じませ彌外さいか越澤  
山ありませ是が秩父絹と申しませ随分高貴の方れお召上りませ又昔の  
町人の用よる事が成ませんとと虚言を混て話を傍から舊旅の主人主「好  
い品だ昔あら見る事も出来あつた當今の流行て...御損のございま

せん一体私しも織物類を長崎邊へ賣捌きま参りたいと平生思ひ居りませ  
が何分資金此掛る商賣故思ひ止つて居りませ...貴紳のお出な成ました  
ら必お大儲をあさいませ彌有難う私し澤山不運續き今度一儲けまませ長  
崎是れ皆を賣る主「其の儲のりませ...彌其れ幾ら澤山買う直廉く越ハ直  
段の廉くお品の上等で...一反十八圓で差上ませ彌最少しませける越ハ何うも  
困りませ十七圓九十五錢又致しませ彌品の上等でも餘り高い最少しま  
ける宜さい不可止と越仕方が有ません十七圓九十錢又致しませ彌止  
そハケ十七圓買う越ハ負てあげませうお幾らお入用て彌百反買う越ハ有  
難う存じませ彌皆を幾ら越ハ皆で二千四百十圓でふいませ彌十圓負る二  
千四百圓上ませと銀貨又て渡そ彌最う買物さい主「誠お有難う存じませ  
と番頭と俱ふ居間お歸り額を鳩めて送るお總賣高を計算すれば金五千六  
百零五圓あり主人ハ二割の口錢を受け皆悦んでお歸りける彌彌と喜城の  
奥坐敷又て買入たる代物を纏め貸倉あるを幸ひあづけて盗火此害をバ



防ぎぬ彌是で倍の儲けのしたいたもんだ喜怒あり限り此無いもんだら儲  
 る丈儲けたい然し損きたら何する彌其時の兩人で乞食を志よう喜已の嫌  
 だ商賈をしるがら漫遊の好いの乞食で漫遊の樂みの薄い彌金があければ  
 仕方ない喜其の措てお前を買りたい物がある彌何だ喜此代物だと種々  
 此織物十七反程を前へ積む彌是の何う志たれた喜お前の代物を買てる間  
 ん傍で資んで置たれた彌驚いた泥棒根性の強い喜でも好るろう嫌る彌嫌  
 でない時は是のら見物と出掛よう喜賛成だと俱々諸々を徘徊して明方近  
 く歸りたり主御愉快でういましてる彌愉快澤山女惚た金持を今迄居てき  
 たア眠氣耐らん主ハ喜女惚た歸さあい金いらぬと言ふ眠い主お休ませ  
 い床も敷てういませ彌ア寐ると兩人與座敷へ行く主驚いた異人だあア

第拾壹回

下女最晝てういませ起あん志よ下女泣せだあア起あん志よ嫌あ人だのん  
 し起あん志よ彌大層寐た睡るアお前一處寐る金遣下女おむら大嫌い

だ此時主人英太の入來り主お前何を志て居る早く鍋を洗んか何うも未だ  
 子供で困りませ過日お話の女をお拘ひみ成りませ事て諸々授し居ませ  
 たの漸々五人程見當りまして只今參て居りませ此方へ聘ませうか上玉  
 てういませ彌此方聘ふ宜志い主ハおあらや姉さん達よお出ッて下女ハ暫  
 くして五人の女が入來る主此別品でういませ彌餘程別品名何んど主ハ是  
 の輕石おわき是の茶臼おまた是の横鎗おまつ是の馬乗およし是の九治郎  
 の娘で爪梨おむびと申しませ彌其う年齢ハ主おわき様十九でおまた様  
 十七でおまつ様の十八でおよし様の十九でおむび様の十七でういませ  
 そ彌長崎行く皆承知主承知てういませ皆両親も親類も無いれで彌皆偽者  
 い正直様ませその女ハ偽ありません江戸長崎や國々まで彌金幾ら用  
 皆渡そ成らん長崎若半分渡そ主其で宜まうういませ此地で頂戴志たい分  
 におむび様の五十圓とおよし様の八十圓とおまた様の百圓とおまつ様  
 の八十圓とおわき様の百三十圓で容子の醜美に倚てお願ひ申るので彌



「調美どの何よ主別品と別品であいので金額の違ひまゝ彌宜しい金渡と  
 偽さい女偽いつのり言りやうの彌宜さい渡とと銀貨あて各へ渡を彌  
 前様方自分此權利さい今日皆此駕旅よ泊る船俟つ女一宜さいのんし權利  
 のあくも金利の有れな能いのんし是より彌爾と喜娥の兩人あて貸倉より  
 織物を出し荷作をさして廻漕店邊多野虎治郎方へ委託し明曉出船の瀬船  
 よ乗んど志て皆々其準備をさせり主お早うムいませ最う出船の時刻お成  
 まそ彌出掛よう喜ねむくつてあらん彌困る早く乗り込うと兩人の五人  
 の女を引連れて出る主お見送りを致しませう少しお俟下さいわき其よ及  
 びません返て時間お遅れまそ皆様左様あらとわかきお先よ立ち四人の佳  
 人の後お從ふ彌其方道違ふよま此方お近いと處々方々を歩く中よ五人の  
 女の影だよ見せ天よ登りしる地よ入しると兩人の大お驚きつゝ血走眼で  
 搜索と彌己お小便をして居る間でお有たお前其時何をして居た喜己か  
 己の犬の交尾で居る此を一寸見て居つた間だ彌大金を以て拘ひた女だ玉

無しお志てままつた己お小便をして居たらお前の氣を附て居おければ成  
 んおさいの喜一体お前の小便お餘りあつた爲めだ彌お前も知ての通  
 る喜承らく淋病で三十分も掛ると云ひ知てるならう喜そうさ餘り永  
 いおら息屈したので犬の交尾んで居るを見物して居たのだ其より女を搜  
 し駕旅の主人へ談判志よう彌船の何うする喜迎も今日此間よの合ん彌其  
 ての切符お割引もある喜仕方おさい彌荷物お先お行てるおら不安心だ  
 彌笛お鳴たぞ困たもんだ喜荷物の大丈夫だろ先づ駕旅へ行て談判志よ  
 う彌其う仕ようると兩人の大和屋英太の住所大川端へ来て見れば戸の閉  
 り明屋の様子あり彌是の妙だ家内中何處へ出て行たらさい喜少し頼む開  
 る早く彌居らんお相違お隣家で聞こう喜御免隣家閉てある誰居ません  
 の女房お出て來り女一今朝何處へ引移りました彌大變だ大變だ彼此  
 野郎お女と腹を合せて己を欺ひものだ大變だ大變だ！可惜大金を損志  
 てしまつた！荷物も何だる怪ましく成た！無事お長崎へ行けば宜いお！何



うも不安心だ。困つた。日本人ヶ澤山最う仕方ない。金少ない。思切  
 て買めめたので澤山損志た。喜是れ是れ其う嘆んでも仕方ない。訟へる出来  
 ん外人女郎賣買許されあい。訟ひる返て損計り彌困たもんだ。お前の没  
 遊を勧めもの。悪い。喜つたらん事を云先づ駕旅を求めて船便をまたう  
 是て損志ても織物で儲けたの宜かろう思ひ切の悪い男だ。金貨五弗務し  
 た困つる男だ其だから駕旅へ着う彌已も最う氣振びして歩きまくもあい  
 今日本で死んだら何うしようお前のおれの遺骸を葬つて呉れるか。喜馬鹿  
 を云志よ駕旅へ行おうと二三軒隔てある南野屋琴太方へ宿を求めぬり彌  
 番頭さん長崎行き船何日ある。番未だ知れません。彌困たもんだ。喜最う此  
 家へ来てから十日又さるの未だ船があいのあ驚いもんだ。彌姉さん長  
 崎行き船何日ある。女未だ知れません。彌困たも何も荷物の氣掛り。番一す  
 お倉どん奥の異人さんの顔を見て。喜。未だ見あいの怖い人らまい何  
 れ彌姉さん倉庫へ来て。喜。来て。主何をしよもの。倉。異人さんを見て。喜。

お抜けまえて。痛い。主離る来て察して遣れ。太郎や連れて行けよ。彌  
 主人長崎行き船何日ある。主。貴紳方が泊り成ておら五度も出船のム  
 いました昨日も一昨日もありません。彌。私共  
 の真違ひで。ム。喜。明日ある。主。明日の午前九時出船で。彌。私共  
 明日其船乗る勘定皆拂う此切符最う無益。主。是の切符で。ム。いません賭博  
 よつらう哥留多で。彌。是れ大和屋英太甘圓買つる。主。彼の大悪者で最う  
 此地に居ると云ふ風説で。彌。仕方ない別物頼むと翌朝も成り主人の厚き  
 扱ひよて小蒸氣に乗て本船に乗るとして漕ぎ出せ。彌。彼の主人の厚き  
 喜。日本人で初めて彼を町噂か人よ逢た。彌。甲板へ出て見あいの。喜。行こう  
 と甲板の上おて彼方此方を眺め居る。彌。向此船お居るの大和屋の主人だろ  
 う。喜。成程其だ小舟に乗て談判志よう。彌。お前が行って彼の金を取返して呉  
 れ早くであいと出殿お近い。喜。承知だ。其準備お取掛る漁船の黒煙を放  
 ち。彌。笛一聲徐々よ進防を初めぬり。彌。困つるもんだ。彼の居るれを見あす



ら行くの實に残念だ。彼も何處へ行くも相違ない。惜しい奴だ。此船を停る譯も不可。一つ船長と掛合て呉れ。其も事があるもんの彼れ略る。輕蔑まで居る。惜らまいか。彌、最う仕方ない。斷念よう。喜、何故か前、其も泣くもの。彌、斷念られまい何うも。残念だ。浮世の嫌な成る身を捨て死のう。喜、困るも氣をおちつけて寐るの宜い。彌、實に其だと轉倒と寐ね前後も知らぬ高野雷の轟くが如くあり。乗客、船來の餌お驚いませよまし、いや。

第拾貳回

此處の長崎唐人町。舊旅を業の貿易屋。虎太の奥二階。彌、早いもんだ。未だ新堀お居る様を心持だ。喜、己の船の勞れて腰の立ん腹の痛む頭痛のする足の疼む眩暈のする眼のかそむ何うも商買の出來ん荷物を取もる行ないお前。お萬事を頼む。彌、困ももんだ。心掛りて成んおら一時も早く聞合せよ。行こう。喜、番頭お云附ら宜る。彌、最う人手よの任せまい。獨りで行こうと立出。て。彌、此方私し荷物ありませ。番、宛名の何様様で。彌、私し長崎でも。番、只

長崎でい分り。愛まそ外をお尋ねささい分りませう。彌、其う有難うと二三丁。行過ぎ。彌、此方私し荷物ありませ。番、何で。彌、私し荷物ありませ。か。番、私し其の料理屋で。彌、いませ。荷物御坐いませ。彌、其う困つたもんだ。嘆息。思まおら其家を出て。彌、御免ささい。私し荷物此方ある。下女、私し方の。下女、私し方。彌、困で。彌、い升。彌、困つたもんだ。私し荷物何處ある。下女、私し存じませ。彌、困つたもんだ。何志たら分る。なろう。疲弊たど石お腰を打掛て暫し考ひ居たれども。頼りよ心安ら。又もや處々を探せし。ど更お所在分り。兼ね。只茫然として歩む。此。彌、困つた朝お探さて未だ分らない。最日暮。うだ。一寸聞ませ。男、何で。彌、私し新潟おら。長崎荷物出しま。また。何處聞く分る。男、宛名の。彌、其かい。只長崎。男、困つた。技しもんだ。何船で出しました。彌、其れ名忘れた。男、何んしろ彼の會社で。聞て。涉覽ささい。彌、有難うと大い。説び。彌、痛い。痛い。膝を擦刺た。困つた。足を引々會社。お到り。彌、淨死私し。新潟おら。荷物長崎出ました。有りませ。番、何様様宛で。彌、



まさる 彌、長崎宛て 番長崎宛て、分り象まを 彌、困つたもんだ 番、其ての 新  
 瀧の何と申と廻漕店へおあづけよ成ました 彌、忘れました連れ此男覺へ  
 て居る 番、何船でお出しよ成ました 彌、其も忘れました 番、困つた幾日よ  
 出よ成たのでと 彌、た志る去月の三十二日でまた 番、三十一日でせう貴紳の  
 お名前、彌、彌爾士太亞智と申します 番、其の記よ成ましたの 彌、番、  
 した 番、只今役員へ通じまそお俟下さい 彌、ハ、と傍比、椅子よ座を 彌、未だ分り  
 ませんか 番、未だ、何うも分りません 彌、最う十時お成りまそ 番、只今捜ま  
 て居まそ此方からお届申しませうか 彌、私し持参まそ 番、彌、何うも赤い  
 と言おがら居眠りをとる姑く志て眼の癢め 彌、大變だ出る處さい誰居ま  
 そと大聲をあげる會社の小使の眼を擦りおがら來り 小使、泥棒の還入も皆  
 起ろ、泥棒だ、泥棒だ 彌、私し泥棒さい 小使、今時分此處お居の舶來の泥棒  
 だ此時大勢集り來て高手小手よ縛り揚言譯とるを耳よも留せ 小使、明日  
 の警察の手よ渡せら覺悟まろ二階お宿直の會頭餘り騒々しお眼を擦

し唯事あらじと二階を下り賭れば外人の慘酷よ縛され涙を流して助けを  
 乞ふ此在様あり近づき寄て篤くと賭れば最前荷物を受取よ來り去外人を  
 り番頭の驚き 番、お前方の泥棒と思ふも無理で、無いの彼はお方の客  
 人だと聞て多くは小使の驚き如何ある珍事よ成行くると吐息をつひて傍  
 よ座を 番、御免下さい此等の者の全く貴紳のお客人たるを知らせ一筋よ泥  
 棒と思ひ斯る無禮を致しましたる事偏よ御免下さいまし 小使、大變だぞ  
 怒たぞ 番、何の御免をと自ら縛を解き平伏して罪を謝を 彌、此會社戸を閉る  
 何時の番、大抵十時過で、いま最う閉店致しまそ時お貴紳の板の間へ  
 大の字形よお臥よおそつて幾らお起し申まてもお起き遊ばされお怒も死  
 またる人も同様よて其醜体を見るよ恐ひを其儘おして置ましたは、彌  
 爾の顔赤らめ 彌、然し私を苦志めましお償金よこそ勘辨まそ 番、貴紳の無  
 理て、いま起まそ起まても起きを醜体を現して此高射委しくお話し申まそ  
 うか 彌、其言ぬ宜しい損害よよせ小使の面々の此言を聞より大に怒り 小使



「其の譯の分らねイ毛唐人から毆殺まで海へ棄ようど六尺棒を手お提げ打掛らんを勢ひ彌爾の大怖を起し顔青ざめて平伏し彌無理言ぬ救せ救せ小使其から黙て歸りヤびるる彌歸るの歸るの荷物あい番お荷物の明朝お出此上お遊し申さまと何も未だ分り兼まそから彌仕方あい不安心だ痛不運計りだ失策多談話頭喜娥の獨り立つ居つ喜宜い味梅も虚病をつめて外出の逃も未だ歸つて来あい何うまゐるう一人て女を買やままいの一体助倍お野郎だお然し心配も心配だど眠りもやらて後居より彌今歸て来た酷い目も達たど有志事共を話そ喜お前の餘程馬鹿だ話しの出来あい彌其う叱咤るもんであい實骨折た喜以面白い男だお明日も亦行くのか喜馬鹿だお彌其位お前お頼む何うの會社へ行って呉れ喜已の病人だ無益だ最う寐よう彌其うさお仕方おあいから寐ようど二人の枕を並べて寐る彌貴女此方来る誠ふ難有う是て手廣く商賣出来まとい貴女可愛い後で夫婦六万圓ありおたらうは夫

婦約束破る私し承知しあい喜い喜い喜い男だ寐語も程ある實は聞苦いであいの彌兩人樂お東京住む其時喜娥のじやまよ成あらし放出して喜實お驚いた男だ起んの彌ア誰だ起したれの可惜處で金を取そまおつる未だ彼の後が見たいもんだ残念だ喜困る男だ夢を覗たのだよ早く寐る明日早く會社へ行け彌いと又寐入りたり彌爾の翌朝疾く起き出て彼れ會社に到り彌私し昨夜参つた者未だ荷物分りまけん番昨夜の若者共の誠も失禮を致しました未だ役員の出勤致しませんで分り兼ます少々お俵下さい彌いと傍れ椅子も座を占めより彌何うも困りまそ最う十一時で番何うも分り憎いそうて最う少々お俵下さい彌困つたもんだとあくびを志おびら凡そ五時間も俵ち居たり彌最う四時成まそ未だ分りませんの番何だお分んと申志居まそ今一應志らべさせませ彌私し朝晝食事志あい俵て居る番其の貴紳の涉勝手彌困つた若し無つたら死あうの困つたと亦も居眠をして待ておる彌日暮た最う十



時だ困つたもんだ。番漸々知れままた。彌、嬉ましい、嬉しい、悦ばまい。番、貴紳の餘程馬鹿で、此記状の何でぞか貴紳の解りませぬ。彌、私し解らぬ。番、一人の猶分らぬ馬鹿も程のある人、迷惑をかけて。彌、私し悪い敷を宜し。いと何共云を四輛の車を雇ひ來つて急ぎ駕旅へ運び行ぬ。喜、何うしたのだお前、死んだと思ふた。彌、漸く解た。嬉、嬉しい荷物を皆運て來ぬ。最う貸食へ預けた大丈夫だ。嬉、嬉しい。是ら一盤けをそるのだお前も骨を折て呉れ。喜、承知だ。姑らく試さん。何と前祝、一晩行こうか。彌、已に儲けてから大愉快お祝を聞くぞ。其をまて今此家の主人に頼んで置く事有る話しの後でまよう。手を拍て主人を招き酒や料理を命じて發應しあむら。彌、お前さん、知己澤山ありませぬ。主、澤山いませぬ。彌、私し共織物商賣、買う人大勢、聘び下さい。明日藤く織物賣ませ。皆上等はあり。主、必を明日の曉で上ま。と今夜の大層涉馳走様も成ました。餘程夜も更ましなから何れ明日と暇を乞て居間、來り兎やせん角やと案じてこそ、の寝るよりけり。彌、澤山酔た。喜、お

前眼、ら膿液が流れる。世穢い男だ。彌、是の仕方、のさい寝よう。安心しな。明日の二萬圓も手に這入る旨いもんだ。言も終らぬ前後も知らて寝入り。より喜、正直な男と枕を並べ寝たりける。主、涉免下さい。早朝甚だ怖れ入ます。買手が七人參て居ます。此方へ通ませう。彌、通す宜しい。主、左様申し傳ひませと暫くして入來り。主、涉免下さい。連て參りました。此方へ、私の驚陸魯一と申ませと。私し、中央米吉と申します。私、末庭虎太郎と申ませと。私し、土井津小門太と申ませと。私、尾張英藏と申しませと。私、志の民屋虫之助と申ませと。私し、後輪無三と申ませと。彌、私共、東京毎度織物賣ました。今度此地初めて宜しく頼む。左様で私の北國の生れで、何うのまて温帯地へ來たいと思ひまして此地へ參りました。寒國よりの宜まう。土、私しも長崎へ來て未だ一年程で、何うも宜い國で、餘り永話しをそるとお耳さわりな成ませ。何うのお品を拜見致したう。いませ。彌、其品物を此方へよこせ。喜、旦那是が宜う。いませ。彌、



「其れ田を喜、是れお前さん幾ら買う一反宜く買入賣る。成程是の秋父相  
 でムいませぬ品の上等でもら一反二圓五十錢も頂戴致しませぬ。此  
 氣違ひ私し新潟一反十七圓買ました。幾ら何うも私しお前さん幾ら  
 土矢張其位で。彌、是れ幾ら買う土、是の米澤でも一反五圓も頂戴致し  
 ませう。彌、お前さん氣違ひ彌、是れ幾ら買う中、是の黄八丈でもお綿が少  
 還入て居ます三圓で頂戴致しませう。彌、私し一反廿五圓で買ました皆是程  
 ある大抵廿圓以上中、其での貴紳の欺されたのでムいませう。彌、困る。失  
 策ばかり損澤山ある。と嘆息するや云と一聲後、倒れ人事を憂ひざりけ  
 れば人々大お驚き。土、困つた誰か宜い藥のあい。彌、彌、彌、死んだ私し一人跡  
 何う志ようと大聲をわけて泣出せ。後、今直ぐ蘇生る心配のありませぬ。土、誰  
 の藥のあい。民、己が持てる違ろうと差出と土井津の手早く取て口よふくま  
 せ水を喝げ、眼を見開き。彌、苦まい喜、お前が死んだら己の何うする心を  
 確かよ持て呉れ。尾、民屋さん今の藥の大層効能がある何んど云ふもん

だ民、彼れの下壓丸と云ふ名で愚時下しお至極妙だ。尾、何處が本家だ。知  
 てる。民、則ち己だ。尾、何て製造も。民、鼻藥。鼻藥をまるめたのだ。尾、其の能  
 くの。民、能くか能るん。知らん。試お進たのだ。彌、彌、此話を聞附て。彌  
 「穢きい醜い目よ逢せる憎い奴だ。尾、貴紳の民屋の爲お蘇生志もであいの命  
 此親だ。悪口を吐い宜まきかい異口同音お其罪をせむれ。彌、彌、彌、頼を  
 擦りつけ。彌、何うも私し悪い勘辨頼む命の親でも恩忘れまい。最う大丈夫  
 か。彌、損をして氣が抜た。喜、氣を丈夫よ持て仕方があるら賣てしまつて  
 外お宜い商賣お取掛る方が利方便かい。彌、重々の失敗で最う手を出そ氣  
 のかい。是を賣拂て別業に掛ろうと断念し。彌、是皆様へ賣る入札頼む。尾、  
 畏まりました。皆様今此處で入札をしたら宜らうと七人の商人の此處で擲  
 めら牡丹餅の味を占る時ありと一風變つた人物を見貫てかある。我利蒙  
 者七人。最濟ました開札を願ひませぬ。彌、畏まりました。開札する。彌、是の駭  
 いも二千四百五十六圓だ。餘り人を馬鹿よする。此の千五百九十八圓だ！



是の何うも…氣違ひの人…眼かい解らぬ…後…二千九百七十圓是れ  
 少し感心…後…二千九百二十三圓是も感心…後…千三百廿五圓これ  
 矢張り氣違ひ…人欺を奴…後…三千二百十圓是れ第壹番感心人ありま  
 と後…三千二百三十五圓…是れ第壹番仕方かい此人賣まると離れ…民屋  
 でムいませ彌金今日いる民其うてムいませる半金の今日お辨ひ申しまそ  
 の半金の二三日拜借を…荷物…悉皆頂戴致して置まして…彌其宜志いお  
 前さん正直喜其れ澤山悪るい荷物金引換ひませ宜志い民其から二三日中  
 よお約束の金額を持參致してゐら荷物を戴きませ彌其れ宜志い民左様  
 からと皆々其處を立去りたり喜何うも廣く賣てませつた幾ら儲けさあ  
 つた勘定見て見る彌少しの損をませるう何れと計算をして見る彌困つ  
 た失策計りだ頂度二千二百六十五圓此損だ其から賣てのあつた約束  
 を解うの喜先で承知志かい今又成て仕方があるもんの彌氣拔がまた  
 毎日青く成て嘆息し居る民御免下さい此方來る宜志い民金を持參致

しまませお受取下さいと渡まければ彌爾の涙を流しおがら彌私し澤山損  
 ませまた最う資金少あく成つたと泣出を民屋の可笑さ遣る方あく民其で  
 ムいませかお氣の毒でと神戸の餘程商業の隆んでとから彼方で一儲けさ  
 されバ直ぐ取返しに附ませ彌何おの向きませる民水産物でと彌北海道  
 知る人ありませ民其の宜うムいませ私しも少々用事が有りませるら左様  
 あらと荷物を人夫又運して自分先お歸りたり成程水産物を買たら必  
 せ儲める早く神戸へ行こう喜其うの賛成だ然し未だ見残した處もある  
 ら見物まで行こうと猶四五日逗留して處々を遊覽し汽船に乗て神戸へ  
 その着あける

第拾三回

番相摸屋でムいお泊んあさい番伊呂波でムい番長門屋でムい座敷  
 も奇麗で西洋料理も出来ませお泊んあさい彌泊るうの喜止そう彌何故  
 喜金があいから彌今お儲ける大丈夫だ喜當よあさい亦損だらう彌



「悪く云ふまよ、喜損を志て勘定が拂ひある、たら已の知んぞ、彌宜しい喜、番頭泊る、番、御案内を致しまそと、兩人の番頭と俱、襦袢旅、若志ぬ、彌此家の名何と云ふ、下女、榮町廿五番地飛多國太兵衛と申志升、彌其う解りました喜、ある、く、神戸の繁華、あ處だ、同國人も澤山居る、ら商法、あ、宜い場所だ、彌其うだ、水産物の向く、そう、だ、ら函館の北岸、此内さんへ電報で相場を聞合せようか、喜、大出来だ、感心、また初つ、ら其う遣りや損、あ、いのだ、彌、らかろう、已の、一体、智恵、あ、ある、れ、だ、一儲け、して、見せる、ぞ、已、一走り、行て、電報を遣て、来る、俟て、よ、と、電信局、も、到り、彌、困つた、歐文、で、出、そう、か、料、金、の、多、いと、和文、で、出、そう、か、書、あ、いと、困つた、不自由、あ、も、んだ、一寸、小僧さん、私、し、言、ふ、お、前、書、く、頼、む、小僧、僕、も、や、書、ま、せん、よ、彌、何、の、頼、む、小僧、仕、方、あ、い、お、幾、ら、の、下、れ、の、書、う、彌、十、錢、小僧、嫌、だ、彌、廿、錢、小僧、嫌、だ、彌、五、十、錢、小僧、書、う、言、ひ、玉、へ、彌、シ、ヤ、ケ、コ、ン、ソ、フ、ス、ル、メ、タ、ラ、ソ、ウ、ハ、イ、ク、ラ、小僧、宛、名、の、何、と、申、し、升、彌、少、し、忘、れ、た、小僧、早、く、彌、ひ、升、彌、函、館、天、神、町、九、十、八、番、地、北、岸、此、内、

小僧、然て、貴紳、れ、名、の、彌、榮、町、廿、五、番、地、飛、多、國、兵、衛、方、彌、爾、土、太、亞、智、小僧、僕、も、あ、る、も、ん、だ、半、助、頂、戴、彌、半、助、解、ら、あ、い、小僧、不、意、氣、だ、あ、半、助、ど、い、五、十、錢、だ、彌、私、し、登、圓、計、り、小僧、其、じ、ハ、Exchange、(兩替店)で、取、替、て、来、よ、う、と、登、圓、札、を、受、取、て、俟、ど、も、俟、ど、も、歸、ら、ね、ば、彌、書、い、た、も、ん、だ、登、圓、ペ、ク、殘、念、彼、れ、未、だ、小僧、誠、お、殘、念、と、稱、宿、よ、歸、れ、の、喜、お、前、の、出、る、と、實、よ、永、い、お、彌、已、の、今、小僧、よ、一、圓、盜、ま、れ、た、電、報、料、の、高、く、つ、く、喜、お、事、の、珍、ら、し、く、あ、い、先、づ、返、報、を、俟、つ、る、宜、い、彌、最、う、返、信、が、来、た、あ、も、知、れ、ん、電、信、局、へ、聞、合、せ、あ、行、ま、う、る、喜、少、し、ま、て、彌、俟、れ、あ、い、早、く、儲、け、あ、い、金、の、顔、が、見、た、い、と、話、を、處、へ、下、女、電、報、が、参、り、ま、し、た、彌、爾、の、聞、よ、り、雀、躍、あ、し、彌、嬉、志、い、何、ん、お、事、の、書、て、有、か、讀、あ、い、困、つ、た、一、寸、番、頭、さ、ん、來、る、話、志、願、む、下、女、長、ま、り、ま、し、た、暫、く、し、て、番、頭、來、り、番、何、あ、涉、用、で、ム、い、ま、そ、の、彌、此、方、來、る、番、只、今、志、あ、け、て、参、つ、た、用、が、ム、り、ま、そ、明、日、で、い、如、何、で、せ、う、の、甚、だ、怖、れ、入、ま、そ、の、喜、お、前、輕、蔑、を、る、惡、い、主、人、喚、へ、主、人、話、を、番、其、う、成、り、ま、そ、と、私、し、の、困、り、ま、そ、飯、の、喰、上、あ、成、ま、そ、何、う、か、御、免、を、彌



「其から此方來い番、彌前是れ讀む番、ハヤケ六五〇、コレノ四七〇、  
 ノ六三〇スルメ七四〇ヲ四八〇と書てございませ、彌前電報書け番  
 「私し、只今急用ございまして彌其れ不可早く書け番、腹の痛い、痛い  
 喜コレヲだコレヲだ番頭コレヲ番最う痊りました彌其んから書くる番、  
 書きませう彌私し云ふ五〇〇〇ウケトレレナミナオクレと書け番、最  
 宜志うムいませ彌前是を電信局へ行て頼んで來て呉れ番、何うも能く用  
 を云附る客だ一文も成らあいと誰々として出て行く跡、兩人の首を長  
 くし荷物の着を俟たりける下女、荷物の参つたそうで喜其うか鳥渡、主  
 人を喚て呉れ下女、畏まりましむ暫時まで主何の御用でムいませお鹿末計  
 り致し居ませ彌外でかい荷物お前さん萬事頼む買手わらば喚ぶたれじ主  
 「承知致しませも早速奔走致しませと飛ぶ如く走り行く荷物、無事、  
 着志相場も頼りお懸賞志たり彌旨いあ一儲けの運ぶ向ひたらう喜其だ賢  
 小此欄を失ふての不可、主御免下さい買手の人々も参りましむ此方へ通ま

ませうの彌通を宜し、私し、東屋福助と申ませ何分宜ま、御免下  
 さい私し、滋賀屋花太郎と申しませ、私し、都屋荒次郎と申しませ、私  
 し、名、角、飯、訪、若、蘭、と申しませ、何分以後、お取引を願ひませ、主、此、四、人、の  
 お方さんの貴紳のお荷物を悉皆買ひ受け度と申して居ませ、只今品を拜見  
 致しませ、至極上等の品を、そうて代價、何程、お拂ふ、成ませう、彌  
 悉皆、二萬五千圓位、て、お、拂ひ、致さん、相場、段々、お、ある、東、其、の、餘、り  
 の、直、段、で、ム、い、ませ、選、何、う、も、お、取、引、お、成、ませ、まい、お、暇、致、し、ませ、う、と、四、人  
 の、歸、ら、ん、と、立、掛、る、を、喜、娥、の、推、止、め、喜、お、前、さん、餘、り、早、い、少、し、待、つ、二、萬、六、千  
 圓、負、る、角、何、だ、人、を、馬、鹿、お、も、る、初、の、二、萬、五、千、圓、と、云、ふ、た、じ、や、あ、い、る、彌、彼、れ  
 其、違、ひ、五、十、圓、引、く、買、う、頼、む、都、嫌、だ、歸、ら、う、喜、坐、る、宜、志、い、六、十、圓、引、く、買、う、頼、  
 む、東、其、お、直、段、が、あ、る、も、ん、の、止、う、彌、都、合、百、圓、引、く、主、私、し、も、御、周、旋、の、致、ま、ま  
 した、お、餘、り、酷、い、直、段、で、お、め、ら、止、お、致、し、ませ、彌、其、から、壹、萬、五、千、圓、負、ませ、買  
 う、頼、む、主、私、し、も、骨、を、折、た、も、ん、だ、ら、仲、へ、遣、入、て、壹、萬、圓、と、した、ら、兩、方、で、彼



是云き取引をして下さらんる彌賣る壹万圓仕方あり又取引頼む都  
 少志損がいくるも知んが其で極ませうと四人の其座よて壹万圓を拂ひ荷  
 をバ受取り歸りたり跡は彌耐の雀躍あし彌實は旨くいつた己の智力あり  
 怖れ入たろう喜已も嬉まいの永く日本に居ては又何を目も逢ふも知れん  
 斯知たから漫遊をるてのあつた彌過ぎ行し事を思ひ見れば日本の實は  
 怖い早く英國へ歸りぬ儲けたのを幸ひは喜已の最う一儲が志ぬい彌其  
 さ已もまたいの怖ろま成た英國が何あふ優美の知れん喜國へ歸れば彼  
 の娘も逢ふら嫌だ彌死んだるも知れん戦々せせと歸ろう喜其うの歸  
 ろうと兩人の談話一決行季を調ふ喜時又暫く攻撃を試さんが何うだ彌賣  
 成だ大好きだと兩人の旅宿の勘定を拂ひ主人あ若干の金を贈つて立出で  
 番頭あ荷物を負せて廻船問屋に到り英國迄の運賃を拂ひ番頭を歸したり  
 喜切符をかうの彌後まよようど兩人の日の暮たるを幸ひは海岸通りを餘  
 々歩む柳の影より現れ出たる年の頃一人の廿二三よ一人の廿歳計は兩

人の婦女最と細やめる手を出して勢は彌爾を呼び止む女一寸旦那彌其  
 女何あありまそ喜賣女遊びありまそ女何うの歩一處よ泊る處ら  
 ありまする女御座いまそども彌何うか願ひまそ金幾ら私しかまわん女  
 有難う存じまそ何うの可愛がつて頂戴あ彌大丈夫妻まそ女嫌で  
 いあど参りませうと一人の女が先立ち或る料理屋へ登りたり女美しい  
 座敷でそ女眞其で何うか此處で可愛て頂戴あ喜彌大丈夫ありまそ  
 此時酒や料理の席上お山をかし彌爾と喜娥の微酔あ成て唄ふ女一寸旦那  
 何うの一人前五圓頂戴あ明朝まで居まそアねい彌五圓外二圓進上あ  
 りますと兩人へ十四圓を與へば婦女の喜び女誠あ有難う存じますと左も  
 嬉志氣も頼お酒を強へ又自分も飽迄喰ひ飽迄飲と女主人が一寸用がある  
 そうて喚お参りました下へ行って参りまそ彌立まいと袋中も成てさ  
 わぐ中あ兩人の婦女の影だ見へねば喜娥の不審も思ふて手を鳴そ女中  
 何れ用でいますする喜兩人婦女何あまて居まそ女中彼のお兩人の婦女



のお客さん、疾ふお歸りな成ましる。彌家の、人皆お彼の婦女知る。女中「存  
 じません貴紳のお連でムいませう。彌「其てあい彼れ知る人有ませう。女中  
 「皆存じません。喜「其の驚いも矢張盗賊ありませ。此處百圓置なさい。彌「困つた  
 怖ろまゝ。國早く立つと、兩人の勘定を拂ふて、以前の廻船問屋お來り。彌「船何  
 時出まそ。主「最う出般致志升のて貴紳方をお捜し申志て居ましな。のて彌  
 「ッ切符買うと金を拂ふ。喜「乗ろうと狼狽して小舟に乗んと。主「お忘れ  
 物のムいませ。喜「餘り急ぐお忘れ。主「一寸お待ち下さい。お忘れ物の彌「忘れ  
 た。喜「舟早く遣れ。主「お忘れ物のございませ。喜「亦たお忘れ。五月蠅。彌「舟早く遣  
 れ。船頭馬鹿ありませ。主「未だお忘れ物の。草袋の彌「私しお忘れ。た。忙しい  
 喜「急ぎありませ。船頭さん。登圓増と早く遣れ。主「未だお忘れ物のあるようて  
 「喜「船頭さん。お前持ち呉れ。船「嫌てムいませ。私ちや船を漕のの商賣で荷物  
 を運ぶのの商賣でムいません。喜「澤山お忘れませ。忙のまゝ。最うお忘れ物無  
 主「無いようて。喜「早く舟漕げ。船「主「未だお忘れ物のございませ。彌「忙し

い。私志此品あり。お前さん。馬鹿な。と。憎らまゝいと。恐口雜言を並べ  
 て。小舟を急がし。本船お打乗て。間も無く。演船の。解纜せり。彌「お前切符を持て  
 る。喜「已の持て居あ。彌「矢張切符も忘れもの。失策計りの多い。損害計  
 り跡。主人の。獨言。船來の。變り者。だ。顔色。見ても。知れら。切符を忘  
 れて。行や。びつた。彼でも。一儲け。を。まゐら。可笑。儲けると。直。歸り。や。る  
 其故。已ら。金の。無い。筈。だ。何れ。地面。家屋。敷迄。も。賣。あ。い。様。又。用心。な。よう



明治廿四年三月六日印刷  
同 年三月廿五日 再版

版權所有

編輯兼發行者 日吉堂 菅谷與吉

神田區佐久間町  
一丁目九番地

印刷者 龍雲堂 大場沃美

神田區柳原河岸  
第十一號地



